目次

法華經より觀たる現代思想（時言）……本多日生
釋尊の大恩……本多日生
實學……山根日東
日蓮主義より見たる無量義經……井村日咸
記事報道十數件……
法華經要文講義……本多日生
那先比丘經通解……本多日生

第廿六年七月號

時言

法華經より觀たる現代思想

本多日生

一、緒言

法華經の內容に就ては屢々お聞きになつて居る事でありませうが、頗る多方面な思想が綜合されて、且つその歸趣する所を明かにして居るので、重大なる事柄は法華經の中に必ず何等かの據り所がある。現代思想と申せば、色々な問題に關係して居るのであつて、頗る複雜な事でありますけれども、その現代思想に對して、法華經は密接な關係を持つ譯であり、その中に於て精しく說かれて居る所と、又簡單になつて居る所と、又法華經の本文には無くして、法華部の他のお經に現れて居つてそれに根據を求めなければならぬ事もありますけれども、現代思想の大切な點に就ては、法華經が深い關係を有して居るのである。それ故に嚴密な意味に於て、法華經より現代の思想を考察し、而してその取捨撰擇を明かにして行く事は愉快な研究でありますが、

それには相當の努力と時間とを要するのであります。あらましの事は自分の考にも浮んでは居りまするけれども、之を研究的態度に於て、その詳細を盡すに就ては、甚だ準備の足らぬことを想ひ當る次第であります。それで、唯だ大體に於て、有力なる問題に對して、自分の思ひ浮んだ事を申上げて、お容しを願ひたいと考へるのであります。

二、研究の態度

そこで、現代思想に關しては、その一々の内容に這入つて考察する前に、その思想を捌いて行く批判の態度、研究の態度を明かにせねばならぬ。それが先づ大切なことであらうと思ふ。或る思想の中に這入つて、その一隅の事ばかりをほぢくつて、その問題のみに就ての當否を論爭して居つても、全體の考察が立たなければ、決して健全なる思想は得られないのである。綜合的考察と云ふことは、佛の智慧の方では、總相別相を覺了すと說いてありまするが、一々の部分に亘つて見れば斯う云ふものになる、それを總括して全體より達觀すれば斯う云ふものであると云ふ事が非常に大切なので、實は部分に沒頭してその部分のみを研究して、その部分のみは正しく觀察されても、綜合したる所の意識が定かならぬと云ふことでは、それは確實なる智識とは申されないのである。所が現代思想の傾向は、部分に沒頭して全體を正觀し得ないやうに思はるゝ、批判をする場合にも、細より細に入り、末より末に走つて、その部分に明るき者を稱讃するやうな傾向があるのであります。その事は大學の卒業論文をお調べになつても分る。總體の議論は

充分に書かないで、部分より部分、枝葉より枝葉、その先の先の氣付かぬやうな事に就て、何か特別調査をしたことを以て、卒業さして居るのであります。左樣に卒業論文がなつて行くのは、先生の頭がさうなつて居るからであります。先生がそれを是認して居り、高等學府の研究方式がさうなつて居るからである。又さうなつたのは世界的思潮であるから、それを是なりとして居るので、結局、現代の文明は枝葉より枝葉に分れて行く文明であると云ひ得るのであります。それが抑も不健全とか誤謬とかの源を爲すものであります。それが抑も不健全とか誤謬とかの源を爲すものであるのであるとは斷定するので、餘程批判の標準が違つて居る。

三、双非双照

大體に法華經の見識は双非双照と申して、双べて否定し双べて肯定すと云ふのであります。双べて否定すると云ふのは、いけないと言ふ時には双方ともいけないと云ふことになる。例へば個人主義と國家主義と云ふものが喧嘩をする、その時には、個人主義もいけない、國家主義もいけない、否な、一つ々々いけないと言つて居つたのでは早や手緩い、どつちもいけないと、いけない所がはつきり分るやうな見識でなければならぬ。又肯定して來る時には、國家主義は良いが個人主義は惡いと云ふやうな、そんなことではいけない、双方とも良しい、と云ふのである。斯く言ふのは曖昧な事のやうに今の思想家は考へるであらう、いけないと云へば双方いけないと云ふ、生かす時には双方とも生かすと云ふのであるから、何を言ふの

かと思ふかも知れぬが、さうではない。双方の缺點を同時に看破し、双方の長所を同時に看出すだけの達識卓見でなくてはならぬ。碁を打つ場合にもそうである、敵の弱點を知ると同時に自分の弱點を知り、敵の優勢なる所を見ると共に自分の優勢なる所が分つて居らなければならぬ、いけないと言へば双方ともいけない所がある。良いと云へば双方に良い所がある。どつちが良いか、白が良い、黑が惡いと云ふやうな事は素人の言ふことである。黑も白も兩方惡い所があるに違ひない、又白にも良い所があり黑にも良い所がある、兩方良い所がある。本當の碁打ちであるならば、双非双照的に、碁盤の全面が見えて居らねばならぬ。少し碁をおやりになる人なれば、その意味合が領解されると思ふ。併し笊碁であればさうはいかない、少し優勢だと云ふので景氣付いて居るかと思ふと、局面が變化して忽ちあゝ惡かつたと云ふことになる。是は所謂短見者流の事である。

四、正　觀

この双非双照すると云ふことを一言にして正觀と名付けて居るのであります。而してこの觀方は、今の所謂學究的態度に於ては得られない、今の器械的智識、算數的智識では得られない、六を二で割れば三になると云ふやうな順序で、物を分解して行く頭では得られないのである。碁盤の全局を見るのみ、一目二目と算へて、此方が五目多い、揚げ石を算へれば此方が十目で向ふが七目しかないと云ふやうに、一々算用して始めて勝敗が分るのではない、一目二目と勘定するのでなく、大觀して分るのである。大觀して分ると云ふことはない、矢張り一目二目と勘定して見たのだらうと云ふならば、一目二目と勘定して行くやうな頭では分らぬ事が、大觀して一と目見て分るのである。その微妙なる能力を發揮しなければ、重大なる問題を解決するには堪へるものではない、この双非双照の正觀が研究の極致となつて來るのである。

五、三　昧

それ故に、この正觀を得るに當つては、先づ三昧を要求して居るのであります。三昧とは、正念正受、或は專念一心と云ふやうな言葉に譯せられて居るのであります。脇目も振らずに、他に精神能力を奪はれぬやうにして、さうしてその精神能力の全部を正しく一點に集中するのである。譬へば敵軍を擊破する爲には、我が軍に於ては一兵卒だも無駄な者のないやうに、坐睡をして居る者も欠呻をして居る者も無いやうに、全軍をして士氣旺盛に活躍せしめなければならぬ。精神能力が分離して、一方では一生懸命働いて居るが、他の一方では坐睡をしたり欠呻したりして居るやうな、不熱誠なる態度を以ては、重大なる問題を解決する事は出來ない。人間が、所謂至誠と云ふが、本氣になつて、大事を決せんとする態度になる時には、一種の平素現れない潜在能力が發現して、通常の場合には理解し得ず判斷し得ざる事をも、能く理解し判斷し得るやうになる。この潜在的能力を發揮せしむるには、平生に於て之を訓練し培養しなければならぬ。唯だ卒然としてその問題に向つて正當なる判斷が得られるものではない。相撲を取る稽古もしないでいきなり裸體になつて回向院の相撲場に飛出して、それで直ちに大關になれるかと言ふと、それはなれ

ない、擊劍にしても、それだけの訓練をせずして竹刀を持つて、直ちに擊劍がやれるかと言ふに、それは出來ない。能力の發揮を訓練せずして、唯だ欠呻半分にやつて居つて、大事の問題に當つて正當なる解釋が出來るかと言ふに、それは到底出來るものでない。この點は餘程強く法華經に於ては示されて居るのである。それが即ち法華三昧と稱するので、他に少しも精神を奪はれない修行をするのである。

六、摩訶止觀

之を天台大師は摩訶止觀と名けて居る。摩訶とは大と譯して居りますが、非常に勝れた意味で賞揚讃歎した言葉である。止觀とは前に述べた双非双照を云ふのであつて、止は即ち双非であり、觀は双照である。摩訶止觀であるが故に、最優等な双非双照をしなければならぬ。一方を否定して一方を生かし、甲の長所だけ見て乙の長所を見る事を逸して居ると云ふ樣な、そんな間拔けたやり方では、觀と云つても摩訶と云ふ字は附かない。止と云つても摩訶と云ふ字は附かない。摩訶止觀と云ふのは完全に双非し完全に双照して、精神能力を十分に發揮するのである。それが爲には法華三昧に入らなければならぬ。さうしてその訓練の方法も明かに說いてあるが、その進み行いた中心思想が、即ち一念三千となつて來るのであります。

七、現代の研究的態度

斯く思想の內容に這入る以前に、思想を考察し批判する準備が、現在の學者達の爲さる所と、法華經に敎へる所とは違ふのであります。是はどちらが良いかと言ふと、只今相撲の例や擊劍の例に於て申した如くに、相撲は筋肉の訓練であるけれども、思想のことも矢張り精神能力の訓練に俟たなければならぬ。前の晩に酒を飲んで亂舞して居つて、翌日醉眼を拭ふて思想の問題を論じても、正確な批判の出來るものではない。相撲取りでも、前の晩に酒を飲んだり遊んだりすると、翌日の相撲には負けると云ふことである。況んや思想の問題に就ては十分なる準備訓練が無くしては、眞の批判を下すことは出來るものでない。又、斯ふ云ふ事を言つて見たら、彼奴等はどう云ふ顏をするだらうと云ふやうな、雜念があつたならば、正念正受は得られないから、正しい批判が出て來ないのは當然である。これを現代の學者先生には、くだらぬ事だと思はれるかも知らぬけれども、決してさうでない。宗敎をやらぬ人でも、必ず大事の前には、この法華經の敎へるやうな態度でなければなるまい。彼の東鄕元帥が對馬海戰の時に、敵艦見ゆとの通報に接したる際の、元帥の態度と云ふものは、矢張り宗敎的の正受正念に住して、さうして所謂皇國の興廢は此の一戰に在りと云ふ信號を揭げられた時、我が海軍の將卒は先づ正受正念に住し、而して蹶起勇奮戰つたのである。それ故に非常なる能力を發現したのである。これは尋常の戰術ではない、砲の射ち方でもない、その精神能力の全部が發現して勝つたのである。それは戰の場合でなくとも、個人に關しての大事の場合にも必ずや同樣である。

八、思想の影響

今日我が國民思想の向ふ所は至大なる影響を特つので、若しこの思想の向ふ所を誤つたならば、大にし

ては人類の幸福を破壞し、國家の進歩を阻碍し、社會の秩序を紊亂し、各人の幸福を蹂躪し去るのである、新の如き重大な影響を起して來る時に方つて、思想の事に携はる者が、輕々しく思想の自由であるとか、學問の獨立であると云ふやうな事を唱へて、その影響の如何を考へないやうては、到底正確な批判が出來るものではない。個人の思想の自由、學問の獨立と云ふことも尊といが、人類全體の幸福とか、國家の興廢とか、社會の秩序といふことはより以上に更に尊といと知らねばならぬ、この輕重が分らぬぼんくら頭では正しい批判の得らるべきものではない。思想の自由、學問の獨立をのみ極論するのは、譬へば三文の物を貫つて喜んで居る一方に、百圓千圓も損をして居るのを知らないのと同一である。

九、日蓮の摩訶止觀

法華經はこの點に於ても眞に模範的の教訓を示して居るのであつて、只今申したやうに摩訶止觀よりして一念三千の妙觀が現はされて居る。法華經の教義を本として思想を批判して行く模範は、天台大師の摩訶止觀と云ふ書物に依つて發表されて居る。更に第二の摩訶止觀として見るべきものは、日蓮の所謂立正觀である。彼が正觀を立てると云ふ時には、天台のやうに靜思默想をして、所謂專念一心の境に這入るのでなくして、是は活動的に法を念ひ國を念ひ一切衆生を念ふ所の、偉大なる精神に立つて、忠臣の心と云ふか、宗教家の心と云ふか、立派な心を發揮して行くので、その定め得たる大精神は、頭が飛んでも、火に投げ込まれても、雪に埋められても、變らないと云ふやうな堅固なる決心を以てし、唯だ意地强いばかりでなく、正しき事の前にば如何なる犧牲を拂つても悔ゐない、又教へられたる正しき信念の前には、絕對の服從を捧げて行くと云ふやうな譯で、大なる精神の準備が出來て居る。この意味に於て摩訶止觀である、日蓮的摩訶止觀である。

一〇、日本第一の智者

彼れ日蓮は清澄山頭に虛空藏菩薩に祈つて願くは我をして日本第一の智者たらしめよと云つて、寢食を忘れて祈願を立て、終に心血を吐いて氣絕するに至つたのである、これは十八歲の時であるが、この熱誠を失はず、益々高め强めて、三十二歲に至つて、長き精神準備よりして進んで日蓮主義を開宣し、その後迫害競ひ來る中に、これを修養の資料として奮鬪して、更に開拓して進んだのである。さうして、汝の言ふことは間違つて居る、止めなければ頸を斬るぞと云ふやうな、白刃頭に臨んでも、我が言ふ所は違はぬと言ひ切る時に、そこに非常な力を現して居るのである。今日、唯だ口の先でペラ〳〵やるとは違ふ。この日蓮の如き正確なる判斷、正確なる考察は何人にも爲し能ふべき事であり、その準備を法華經に於ては要求して居るのである。それが日蓮に於ては、開目鈔となり本尊鈔となり、安國論となり、或はその他の遺文となつて現れて來て、法華經より觀たる現代思想として、日蓮はその當時に於て意見を發表したのである。

一一、我等の準備

自分等が今この講題を與へられてお話をするにも、矢張り同一の準備を要することである。吾々は十分

なる準備を持たないて唯だベラ〳〵思想の事を言つて見た所で、本當の解決は附くべきものではない。若し我が言に誤る所あれば死を以て謝すべし、我が言にして正しければ、千萬人と雖も我れ征かんと、眞に覺悟したる所がなければならぬ。あゝも言つて見る、斯うも言つて見る、と云ふやうなフラ〳〵した考て、思想の事に當るべき時代ではなからうと思ふ。それ故に現代思想の考察批判に對して、法華經は深刻なる警告を與ふるものと思ふ。

一二、釋尊の準備

釋迦牟尼佛が法華經を說かんとする時の準備は如何なるものがあつたか。その時の有樣は法華經に現れて居る。大覺世尊ですらも無量義經より法華經に移らんとする時に、今迄無量義を說いて樣々に說き分けた思想は、之を根本の大思想に統一しなければならぬ、それには精神の準備が要ると云ふので、無量義處三昧に入つて身心動じたまはずと云つて、一切の精神能力を集中して、而して思想の歸趣、統一の一處に向つて全力を注がれた。その瞑目せる時に眉間より光を放つて、その光は東方萬八千の世界を照したと云ふやうな偉大なる力が發現し、さうしてその中から說き出されたのが法華經である。思想の考察批判に對しての準備を、釋尊ですら左樣な莊重なる態度を以てせられたのであります。さうして三昧より安祥として起つと云つて、すつかり思想の順序が立つて、如何なる思想でも快刀亂麻を斷つの概を以て說き出したのが法華經である。この點が先づ法華經と現代との關係に就て確に比較して味ふべき點であらうと思ふ。

一三、思想取捨の方針

それから思想を取扱つて行く上に就ての主義と云ひまするか、方針と云ひまするか扱ひ方であります。例へば折衷的態度に於て、良い所を寄せ集めて採ると云ふやうに、思想を捌いて行く場合に於て大體の主義がなければならぬ。今日の思想問題に就ても、在來の日本にありし良きものは之を採り、又世界的思想と雖も良きものは採ると言つて居る、さう云ふ事を言つて見た所で、何處が長所で何處が短所であるかと云ふ事が分らないで、雜然たる頭でやつて居つたならば、その長所を採ると言つて居りながら、長所は忘れてしまつて、却つて短所を採ることがあるかも知れぬ。さうして勝手々々に、俺は世界的思想の長所を採つたと思つて居つたならば、是れ赤兒戲に等しきことである。況んや自國の長所のみを採つて、妄りに他の長所を顧みないと云ふやうな排斥的態度を執るとか、自國の文明は全然忘れてしまつて外來思想に屈從するが如きことになるならば、何れも唾棄すべきである。法華經に來る時分には、他のお經には目もくれないで、一概に排斥すると云ふことであつたならば、それは間違つて居る。又法華經に來つても法華經の眞價を知らずして念佛がどうだと云ふやうなことで、他の思想に屈從して行く頭であつては、これ亦無量義經一卷も消化することは出來ない。

一四、爲實施權

そこで折衷と云ふやうなことも法華經には網格を示されて居る。良い所を採つて折衷すると云ふにも、

何から判斷してその良い所が出て來るか。さう云ふ思想の扱ひ方、主義方針と云ふやうな點に於ても、法華經は所謂開顯統一と云ふのでありまして、開顯統一の意味合が、能く研究されなければならぬのであります。開顯と云ふのは是は略した言葉であります、委しく言へば開權顯實と云ふので、權を開して實を顯すと云ふことであります。この開顯と云ふことの前には爲實施權と云ふことがある。爲實施權とはどう云ふ事であるかと言ふと、元來文明を造るには根本に於ける大理想が初めに打立てられなければならぬ、その打立てた大理想を一度に現すことは出來ないから、部分々々から現して行くのである。如何なる場合にも初めに定められて居る大理想から觀て、それに觸れないやうに、衝突しないやうに、總ての事がその中心より指揮せられなければならぬ。若しも中心に打立つる眞實なるものが無く、文明の大理想なくして、唯だその時その時の思ひ附きを以てやつて行くならば、それは根本から問題にならぬ誤つた事である。それ故に、如何なる問題でも、實の爲に施されるものであつて、大理想から之を切離しては判斷する事は出來ない。それは政治の問題にしても經濟の問題にしても、社會政策であらうが何であらうが、一つの大きな理想。例へば吾々人類の文明を構成する所の根本理想は何であるかと云ふ事を知らなければならぬ。

一五、文明の根本理想

何が根本の理想であるか。その時に、個人の利益、幸福、權利を全ふすると云ふが如き事を以て、人類の根本理想にすると云ふ事であつたならば、それは既に大理想なるものを有つて居らないのである。その事自身としては差支ないやうであるが、それは非常に貧弱なる誤つた思想である。今日世界の思想は、所謂大調和主義と云ふか共同生存主義と云ふか、總てのものがその所を得て行くやうに、全體と云ふことの大切であるのを認むる、個人を離れて全體は無いと云ふが、個人よりも全體が大切であると云ふ事を、社會を構成して行く上に置かなければならぬ、元來社會を構成する原理は、社會の共存を目的とし、大調和を目的として居るのである、それが人間の行爲であると云ふ原則を定めなければならぬと云ふ事に、近頃になつて世界の思想が向いて居る。社會奉仕とか社會政策の必要であると云ふのも、さう云ふ思想の下に立たなければならぬ。これは一つの例であるが、さう云ふ思想が確立して居つて、それから政治も經濟も導かれなければならぬ。大理想を離れて、政黨が自己に便宜なる政治を執るとか、一部の資本家の都合の宜い經濟政策を立てて、それが爲に國民が犠牲になると云ふ事であつたならば、それは罪惡である。さう云ふものは理想の文明を構成する上の手傳ひとはならないで、却つて理想の文明を構成する上の害物となるのである。それ故大なる理想を本として一切の事を判斷しなければならぬ。

一六、廣權立實

そこで、この大理想を標準として總ての事を判斷する場合に於て、實とは斯う云ふものである、權とは斯う云ふものであると云ふ區別を領解して、之を明かにすることが必要であります。例へば政治上に於て、黨派觀念に囚はれて居ると、或る事情の爲に誤つたる政策を執るとか、政治家が低劣になつて來て、高

き宗教道德の理想を忘れてしまつて、實利主義に陷ると云ふ弊害があるとか、斯の如き弊害を十分明かにして、道德宗教の理想を離れたる政治は全然意義の無いものであると云ふやうに、そこは嚴嚴なる批判を加へて、彼等をして足腰の立たぬやうにしてしまふと云ふことでなければ、之を活して來ることは出來ない。それが廢權立實と云ふことである。それでありますから、法華經に於ては、實を離れたる權は、是は非常に攻擊せられて居るのであります。

一七、開權顯實

それから進んで開權顯實と云つて、その權を開會し、疏通して活して來て、さうして實の意味を顯して行くのであります。大理想から見れば、政治も經濟も固より必要である。けれどもそれが大理想から離れる時には、その缺陷を指摘しなければならぬ。そこで之を破開同時と云つて、いつも破と開との思想が離れずにある。例へば政治に對する觀察を下す場合にも、その政治が高き道德の理想と離れたならば、それは全然價値なきものである、併しそれが、理想と離れぬ時には、如何にも政治は大切であると云ふので、活かす意味と切捨てる意味とは、常に同一の力を有つて居らなければならぬ、それが即ち双非し双照すると云ふのである。否定する時には總てを否定し、活かす時には總てを活かす、さうして双非し双照すると云ふ二つが同時であり達觀されなければならぬ。そこに玄妙なる觀察と云ふものが起つて來るのである、故に、斯の如く思想を扱つて行くその主義方針を開顯主義と法華經では云ふのであります。

釋尊の大恩（承前）

本多日生

今一つは斯ふいふ事が考へられると思ひます、それは吾等の精神の要求であります、唯今申したのは人間の低い方面の要求でありますけれども、人間は精神の光を持つて居りますこと故に、精神の滿足といふ方から申せば、いろ〳〵善き事をしようと考へ、そこに道德的の情操を有つて居ります、或は哲學的の理智を有つて居ります、又あらゆる自然の美に觸れ、或は宗教の信仰に入るやうな非常な尊い情操を有つて居ります、それ故に人間の生活を續けて行く上に於て最も大切なることは、この精神の要求を成べく發達せしめて、精神の要求を滿足せしむるやうにして行く事であらうと思ふのであります

す。

所がこれ亦容易な事ではない、智力の滿足の方からいへば初めは子供の時分から何でもない事を一々聽いて居る、「お母さんこれは何です、これは何です」といつて小さい子供が繪に書いたやうなものを持つて來ては聽く、「これは自動車です、これは電車です、これはキューピーさんです」といふやうな譯で、何でも教へて貰つて段々に智慧が進んで行く、それから小學校となり、中學校となり、大學校となつて段々やつて行く、けれども一番善い所は分りませぬ、何處まで行つても分りませぬ、大學を卒業しても分りませぬ、大博士になつても一番大事な所といふものは分りませぬ。その大事な所といふのは、前に言ふ己れに歸つては生命の問題が分りませぬ、外にしては宇宙の大原則が本當に分りませぬ、神や佛の大事な事が分りませぬ、掌を合せて宜いか合さぬて宜いか、合さぬのも工合が惡いやうだし、合すのも何だか工合が惡い・・・どつちもいかない、先祖の法事がある、「俺は無宗教者だから先祖の法事などは認めぬ、併し認めぬと言つてもちと工合が惡い、親不孝のやうにもなる」といふので仕方がないから燒香はするけれども、何の爲にするのか分らぬ、だから尻を半分持上げてやつて居る、これは實に愚な人と言はなければならない。學問したといつた所が大事な所が分らない、宇宙の根本が分らない、自分が分らない、さうして神や佛が分らない、この大きな問題が皆分らない、それではこの智的要求を滿足せしむる事が出來ませぬ、智力から求めての平和を得る事が出來ませぬ。それ故に學問すれば却つて弱くなり、學問すれば却つて迷ふやうな事になります、それは途中の智慧しか得て居りませぬから、智力の安定に達することが出來ないのであります。

その本當の智慧を與へ給ひし所の者は大聖釋迦牟尼佛であります、釋迦牟尼佛に依れば、この宇宙の實相眞如の妙法がはつきり吾等に信ぜられます、自分に就ても自分の生命、自分の本體がすつかり分ります、佛樣の事、神樣の事に就ても、佛教ほど鮮かに教へて居るものはありませぬ、他は多く想像であります。それ故に科學の知識に依つて直ちに破られます、佛教は科學の知識に破られるものではありませぬ、科學の幼稚なる所を導いて、科學を更に進めてさうして佛教の信仰に達すべく導いて行くものであります。元來佛教は因明の法則から一切を組立てゝ居ります、大聖釋迦牟尼佛の理論は嚴密なる所の論理の因明を以てすつかり組立てゝあります。それ故に彼は智慧を愛しました、他の宗教家は智慧を罵りますが、釋迦牟尼は先づ大智慧を得ずんば止まぬ、大覺を成ぜんければならぬと言つて大智慧を求めました、その中から大慈悲を發射しました、この點に於ては實に釋迦は偉い方であります。それ故に釋迦の說き去り說き來る一代經典は、決して一般宗教の言ふやうなお伽噺のやうな想像的なるものではありませぬ、大眞理の上に建設せられて居る所の世界最高の宗教であります。

此に於て吾等の精神の要求に滿足を與へますから、如何に知識の進んだ者でも掌を合せるのであります。現代人は知識の上から佛教を罵ると言ひますけれども、それはさうでない、知識足らざるが故に佛教を罵るのであります、如何に現代人が自惚れて居りましても、我國の過去の歷史に現れて居る聖

徳太子、傳教大師、或は弘法大師、或は菅原道眞、水戸光圀とかいふ樣な人は、これは決して愚かな人ではありませぬ、皆賢明なる哲人であります。併ながら釋尊の前には皆掌を合せて拜みました、吾等の先覺者の中に於て釋尊に掌を合せないのは、徳川時代の朱子學でもやつた樣なパイ〳〵の手合以下の者であります、堂々たる所のこの日本の文化を作り成したる人々は、皆佛陀の前に掌を合せたる所の人である、今日以後も亦さうなつて來るであらう、東洋人にして釋尊の大恩を理解しない樣な者が、文化運動に携はるなどといふ事は、片腹痛い次第であります。

そこで第二の道徳的の情操を滿すことに就きましても、人は善い事をしようと思つても、中々思ふやうに行きませぬ、それを釋迦如來に依つて導がれますれば、道徳の根柢も分り、實行の力も與へられるのであります。朝、顏を洗つて掌を合せた時、人は必ず善に向はうとします、掌を合せて居る時に惡い事をしようとは考へませぬ、「今日は何處へ泥棒に行かうか」といふやうなことは考へませぬ、泥棒に行かうかといふやうな事を考へる時には、いきなり先づ第一に珠數を切つて捨てます、手に珠數を懸け、佛壇にお燈明を上げて鐘を叩いて「サア、そろ〳〵泥棒に行かうか」といふやうな人間は、古今一人も無いのであります。その合掌禮拜の中には、何物か善を生ずうとする强烈なる所の道徳力があるのであります。左樣にして吾等はこの精神の道徳的の要求を滿足せしめられるのであります、先づ佛壇の前に坐つて掌を合せただけでも好い氣分である、穢れたる精神を逐拂つて、淨き目的に進む所の門出である、

手を洗ひ口を嗽き、佛前に禮拜したる時の氣分といふものは、さながら道徳の世界に歩み行く所の勇者であります、その意味に於て吾等は精神の滿足を與へられるのである。

又宗教上の滿足或は美の滿足、これは皆佛陀より來て居ります、殊に我國の歴史的研究を致しますれば、吾等の先人が憧れたる所の美術は皆佛教に關係を有つて居るものである、左樣にして吾等の先人の生活が豐富にせられ、彼等が樂んだのも皆佛陀のお蔭であります。今日でも奈良に行つて奈良の名所を巡るとか、京都に行つて京都の名所を見物するとかいふ事も、皆さんが「お前も嫁入前であるから一つ奈良を見物さしてやらう」といふので伴れて行つて貰つて、さうして「これが奈良でありますか」と言つて悅んで見物して廻る、その盛與といふものゝ本には皆大聖釋迦牟尼佛の御恩が籠つて居るのである。それは實に多大な文明を佛教は日本に開いて居るものである、若しこの佛陀の御恩がなかつたならば、奈良へ行つたとして見た所が、奈良は佛教の關係がなければ唯の野原である、草が生えて居るのみであつて、何の盛與も湧くものではない、京都にしてもその通りである、田舍から出て京都見物をした、奈良見物をしたといふやうなことも、皆その歡喜は釋尊の御恩である譯であります。

斯樣に教へ來るといふと、釋迦如來の御降誕が吾等に非常な關係を持つのでありまして、私はこの三つの點に於て――即ち(一)吾等の生命を明かにし、その生命を重んずる事に於て、(二)吾等の肉體の慾望を整へてこれを淨める點に於て、(三)吾等の精神の要求を滿足せしめて、益々精神の生活を高めて下

さつた點に於て、釋尊の大恩に感激感謝せざるを得ないのであります。

これは唯だ個人の現在生活に就いて申したのでありますが、その個人が何時かは皆人生が終るのであります。その人間としての生命が終つた行く先に就ては、無論佛樣のお力に依つて導かれて行くのであります。それ故にこの釋迦如來の大きな教と大きな人格とに依つて感化を受けた人達、我々は無論でありますが、吾々の先人も皆その力に依つて永遠の幸福を認めて一生を送つたものであると思ひます、その結果家庭に於ては必ずその教の感化に依り、人格の感化に依つて、佛壇を置いてお釋迦樣の事を信心します爲に、家庭が如何に圓滿に、さうしてその家族が幸福を享けるか、實に大きな事であらうと思ふ。若しも日本の文化に佛教が無かつたならば、もつと〳〵我むしやな亭主が澤山出來て、ちよつと一パイ飲んだと言つては女房の頭を打つたり、お婆の腰を蹴つたりする者が今日よりどの位多かつたか分らぬ、女の人などが餘り癇も出來ずに一生を終つたといふのは、皆お釋迦樣の御恩であります。又お釋迦樣が無かつたらば、棄兒とか或は墮胎といつて姙んだ子供を墮すといふやうな事がどの位多かつたかも分らぬ、諸君等も皆墮されてしまつたかも分らぬ、非常な所に影響を持つて、家庭の幸福を保全したものである、これは隣の小母さんよりも親類の伯父さんよりも、一層釋迦牟尼世尊が吾等祖先の家庭の幸福を保護し給ふたのである。又社會の出來事に就ても、日本の國家の發達に就ても殊に國體を擁護し奉つた點に於て、日本人が從順にして國體を尊重して參つた點に於て、皆この佛教が大いに影響して居ると私は信ずるのであります。

これに就て釋尊の御一代の事を簡單に申上げて見たいと思ひます、釋迦如來はどういふ風にしてお生れになつたかと申せば、これは佛本行集經といふお經に出て居りますが、丁度この花咲き鳥囀る四月八日を以て、嵐毗尼園といふ王樣の御苑の内にお生れになつたのであります。御母摩耶夫人がこの嵐毗尼園の花を見て、如何にも好い氣分になつて園を逍遙し給ふ時にお生れになつたのであります。父の淨飯大王が大變お喜びになつて、大勢の人相見、或は占ひをする者をお集めになりまして、この生れたる太子の前途を占つて呉れと仰しやつた、そこで澤山の相師、占者の有名な者が皆集つて、さうして綺麗な藩圍の中にやす〳〵と寢てお居てになる悉達太子のその藩圍を取り、着物を取つてお顔からお體を拜しまして、皆大勢の者が驚いたのであります。その時に申した事が長阿含經の一の卷に出て居りますが、「諸の相師はその具相あるを見」といつて、缺け目のない揃うた尊いお相を見まして占つて曰ふのに、「此の相ある者は當に二處に赴くべし」――この御人相から申せば二つの尊い相が現れて居ります。

若し家に在らば當に轉輪聖王となつて、四天下に王として四兵具足し、正法を以て治むること偏狂ある無し、恩天下に及んで七寶自ら至らん、千子勇健にして能く外敵を伏し、兵杖を用ひずして天下太平なるべし。

悉達太子が家に居て國王の位をお繼ぎになるならば、轉輪聖王といつて非常な立派な理想の王樣にお成りになつて、四天下といふ廣い〳〵領土を治めて、澤山の兵隊を帥ゐ、正しき教を立て〻恩は天

下に及んで、兵隊は居つても戰などはしないで、道徳上の感化からしてちやんと平和が實現されて來る、申し分のなき結構な王樣に成られるといふことを言ひました。

若し出家學道せば當に正覺を成じて十號具足すべし。

若し家を出て御出家なさつたならば、正覺と言つて佛樣に御成りなさつて、十號といふ尊いお名前が十も附くやうな――それはお經の至る處に言うてあります所の如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御、丈夫、天人師、と申して（これは一々に意味は深いのでありますが）、何とも言ひやうのない結構な名前を備へた佛樣である、如來樣である、世尊であると申して大勢の者に渴仰される所の尊い方に成られるであらうといふ事を申した。所が少し遲れて參つた阿私陀仙人といふえらい學者がありまして、（仙人というても支那の仙人みたやうな山の中に居る者をいふのではない、印度では偉い人を仙人というので、お釋迦樣でもやはり仙人と言うて居る、詰り學者であります）、その阿私陀といふ宗教の大學者が言ふには「君達は若し家に在らばとか、若し出家せばといつて二つの事をいふけれども、それは見究めが附かぬといふものぢや、自分が見た所ではこれは出家されるに決つて居る、必ず佛樣にお成りなさつて非常な尊い教をお說きになるに違ひない、併し私はその教を聽く事が出來ない、私はモウ年を老つて居る、太子が成道の時まで生きては居れないし、死んでは天上界に生れてこの人間の世界へ出て來られない者であるから、お釋迦樣の說法を拜聽する事が出來ない、洵に殘念だ」と言つて慨きました。それから父の淨飯王は、この太子は必ず出家するといふ事を阿私陀が言うたが、洵に氣懸りの事ぢやといふので、成長するに從つて色々立派な御殿を拵へ、印度第一の美人耶輸陀羅姬を妻とし、あらゆる恩愛の絆を以て此を繫いで、どうしてもこの家を出られぬやうに、精神を物質の慾望の方へ〳〵と導きましたけれども、悉達太子はさういふ事に迷はないで、段々年が行つて二十五歲になりまして、さうしてこの人生の總ての事をお考へになりまして、どうしても人間を本當に救ふには心の中から救はなければならぬといふ事をお考へになりました、これは實は大きな問題でありまして、無論兩方相俟つて行かなければならぬ、外部の制度と精神の內部と兩方から行かなければならぬのでありますが、昔は精神の內部から行く方が本當であるといふ事を人類が認めて居りました、西となく東となく、人類は精神の內から淨めなければならぬといふ事を信じて居りました。所が近世文明がこれを打破つて、心は濁つて居つても嘘を吐いても何でも構はぬ、唯だ外部の法律や制度や、それ等のものに依つて社會が完成されると考へました、さうして精神の方面を捨てゝ外部の組織にのみ依つて文明を作らうとする事になりました。それがうまく行けばお慰みであつたけれども、明かにその失敗といふものが今日は現れて來た、現れて來たけれどもまだ氣が附かない、中〻人間といふものは、あんぽんたんの奴が多いから、少々ぐらゐ遣り損うてもそれを何處までもやらうとする、殊に惡い事といふものは遣り損つたから改めると限らない。泥棒なら泥棒といふ者は、きつと遣り損つて捕まるに定つて居る。さうして牢に打込まれ

る、けれども改まらない、牢から出て來れば又やる、さうして遣り損つては牢に拋り込まれる、又出て來ては遣り損ふ、何遍遣り損つても改まらないで、十犯二十犯三十犯といふやうになるのである。今の文明といふものも、モウ早や十犯や十五犯のやり損ひはやつて居る譯だけれども、まだ止めないのである、日本ばかりがやり損ひが無い譯ではない、日本でも「この點に於て遣り損ひ、あの點に於いて遣り損ひ」といつて列擧したならば、精神の方面から開拓する事を忘れたが爲の失態といふものは十にして足らざるものであります。けれども人間は負け惜みの强い者であるから、そんな事をやつた者は尙更何處までも我々張る、實に淺ましいものである。

釋尊のお考は、何といつても今の人が考へて居るやうに制度が先ではない、精神が先である、制度を擲つてはいかぬけれども、精神を第一にして大に制度といふ事に考へて行かなければならぬ、無論お釋迦樣は宗教萬能とか精神萬能とは仰しやらない、政治の大切なる事も、軍備の大切なる事も、經濟の大切なる事も、色々の社會組織の大切なる事も皆仰しやつて居る、物質の大切なる事、パンの大切なる事、皆仰しやつて居るけれども、何處まで行つても精神が一番大切であるといふ事を力說したのである。この意味に於て彼は迦毘羅衞城の王樣とならなかつた、自分が迦毘羅衞城の王樣になつて善き政治を行うて見た所が、本當に人は救はれない、又政治は自分の支配して居る所の領內にしか及ぶものでない、少しくその支配管轄權が違つたならば、他には及ぶ事は出來ない、「斯うせい」と言つた所がそれは何の價値もない、そこで非常にお考へになりました、どうしても廣き範圍に永き時代に亘つて全人類を救濟するには、迦毘羅衞城の王樣になつたのではこの目的を達する事は出來ない、精神の本を開いて、所謂無上正覺を成じて今の文化の缺點を補うて、善きものは保存するけれども、足らざる所を補ひ、將來に開け來る文化の魁をなして、さうしてこの全人類の精神の內部よりこれを救はなければならないものである、それが或る意味に於て世界の王樣であり、或る意味に於て永遠の王樣であつて、五十年や七十年て位が變る王樣ではない、人類のあらん限り千年萬年の末までも續く所の王樣である。さうしてこれは鐵砲を以て生命を奪ふことも出來なければ、軍艦を以て位を奪ふことも出來ない、全人類がまるつきり馬鹿になれば知らん事、全人類が賢くあり、全人類が淨められて行くならば、何處までも我が敎を滅すことは出來ぬといふ觀念を持ちました。非常な大きな考を以て彼は決心したのであります、或る人が言ふやうに、彼はへこたれて悲觀をして家を出た、美しい女房と暮して居つて見た所が、何時別れるかも知らんと言つて、悲觀厭世をして出家したナンといふことは、釋迦を知らざるも甚しいものであります。釋迦はそんなことならば悲觀も何もしませぬ、實に幸福な生活をして居る、彼等が言ふが如きことならば、悉達太子は耶輸陀羅姬を妻とし、三時殿を持ち、迦毘羅衞城は最も名譽ある所の國家であります。又彼の力を以て進み行きましたならば、相當なる事業を打樹てることも出來るので、少しも悲觀する所はありませぬ、自分が戀ひ慕うて居る所の妻を人に奪られたとか、試驗に落第して入學が出來ぬとかいふやうなことは、悉達太子には一つもなかつた

のてあります、實に歡樂を以て滿されて居る、何故に彼が悲觀すべき材料がありますか、彼は自身の上に一點の悲觀すべき所がありませぬ、何處を悲觀するか。それは外へ出て見た所が、立派な金持の親爺が死んて葬式が通る、アヽ可哀さうぢやといふことは言ひましたが、それは自分が悲觀したのてはない、彼等富み榮へたる者も死すれば實に哀れなものてある、妻子眷族泣きの涙を以て送る、これが人類の總てを襲ふ所の悲みてあるかといふ事は考へました、それは大なる慈悲觀てあります、大なる救濟の精神てあります、彼の親が死んて、愛するお父さんと別れなければならぬと言つて泣いたのてはない。

だから悉達太子は左樣な個人的の小さな悲觀に依つて出家を思ひ立つたのてはありませぬ、非常な大きな理想を懷きました、或る夜庭に出て閻浮樹の葉の下から天を仰いて居りました所が、美しい星がキラ〳〵と光つて居ります、何といふ綺麗な事てあるか、これを見て居れば實に愉快てあるが、一度目を下して地上を見るといふと、病氣て呻いて居る者があり、死んだと言つて泣いて居る者があり、女を奪られたと言つて怒つて居る者がある、何と人生は穢ない且つ苦しいものてあるか、天を見れば綺麗なものてあるが、何故に天のみ斯くも綺麗にして人間は斯くも苦しい穢ないものてあるかといふ事を考へました、さういふ事がお經に說いてあります。そこてどうぞこの人間をして、淨き天に星が燦めいて居るやうな精神に導きたいものてある、それにはどうしてもぢつとして居つてはならないといふ所から、彼は最愛の妻耶輸陀羅姬を捨て、迦毘羅衞の城を捨て、悉達太子の位を捨て、帥ゐて行くべき大勢の部下を捨てゝ、唯だ一人夜半に王城を去つて行くのてあります。その時の光景を見ますれば、自分の日頃愛して居ります車匿といふ馬丁を一人呼出して言ひつけました、「お前は能く俺の言ふ事を聽かなければならぬ、俺はこれから迦毘羅衞城を出て大いに修行をしようと思つて居るのてある、他の者に知らしては止めるから知らす事はならぬ、乾陟といふ馬を牽き出して來い、乾陟は勢ひが良いから、いきなり牽き出したならば必ずや大きな聲を擧げて嘶くてあらうから、鬣を撫ててさうしてそろ〳〵と牽き出して來い」、その命を奉じて車匿は乾陟を牽き來りますと、悉達太子はその馬に乘り給うて城をソッと脫けて出られた、供をする者は車匿一人てあります。そこに段々話はありますが、斯くて悉達太子は山にお入りになりました時に、迦藍阿羅邏といふ仙人の所に行きました、仙人といふと誤解しますが、印度第一の宗教大學者てあります、その大學者の所にお出てになりました所が、彼はいきなり言ひました、「あなたは悉達太子てあらせられるか」「さうぢや」「あなたが王城を捨てゝ此處にお出てになり、精神の光を求めて修行をなさるといふ事は、恰も大象が牢鐵鎖を踏み切つたやうなものてある——牢鐵鎖といふのは堅牢なる鐵の鎖てある、頑丈な鐵の鎖を以て象が四本の脚をすつかり繫がれて居るのを、その鎖を踏み切つて飛出して來たやうな勇しい事てある、あなたの右の足は耶輸陀羅姬といふ鐵の鎖を以て繫ぎ、左の足は三時殿といふ春は春の御殿、夏は夏の御殿といふ美しい御殿の鎖を以て繫ぎ、手は王樣に成れるといふ所の名譽富貴を以て繫ぎ、色々なものを以てあなたの全身は鐵の鎖を以て繫がれて居た、その一

般の人の脫劫し得ない總てのものを踏み破つて出て來られたは、實に勇ましい事である」と迦藍阿羅邏は斯樣に言ひました、その時に悉達太子は「さう褒められては困る」と仰しやつたかと言へばさうではない、「先づ左樣なものぢや」と仰しやりました、これは實に自ら任ずる事大なるものであります。次に迦藍阿羅邏が言ふには「あなたはお見受け申しただけても法橋任持の人である」――法橋といふのは法の橋である、木の橋は人間や車を渡すが、法の橋は迷へる人を導いて迷の岸より覺りの岸に、狼狽へたる者を安定の岸に送る所の橋である、精神的教化である、「あなたは法の橋を架ける所の立派な人とお見受け申す」と言つた。悉達太子は「先づ左樣なものぢや」と言はれた、實に確信を持つて居られた、中々えらい方であります。けれどもこの迦藍阿羅邏も自分の先生にするだけの價値が無いものであるから、一晩泊つたきりで其處を去つて、今度は自ら一人正覺山の麓に於て大きな菩提樹の下に良き場所を選んで、軟らかな草を敷いて其處に端坐して、これから行を積むといふ事になるのであります。

その段々行をして居る間にも、王舍城の頻頭娑羅王といふ印度第一の大きな國の王樣が、どうぞ一度お出でを願ひたい、御馳走をするからといつて態々迎へに參りました、そこで悉達太子がお出でになると、頻頭娑羅王が言ふには、「あなたはあんな所に草を敷いて坐つて居るのは詰らぬ事ではありませぬか、どうぞ私の國に來て下さい、私の國の土地半分と兵隊半分、總て半分上げますから、あんな所で默つて坐つて居ることは止めて戴きたい」といひました。その時に悉達太子が「それは有難い」と仰しやるかというとそんな事は仰しやらない、何と言はれたか「娑伽羅龍王豈復た牛蹄の水を貪るべけんや」と言はれました、娑伽羅龍王といふのは水を支配して、天に上つては雨を降らし、海の水を支配するといふ水の神樣であります、牛蹄の水といふのは牛の蹄の跡に溜つて居る水である、牛が歩いた足跡に雨が降つて溜つて居る水を、娑伽羅龍王を呼んで來て、「お前さんこの水を上げるからお飲みなさい」と言つた時に、娑伽羅龍王が「それは御馳走樣でございます」といつてペロ〳〵これを舐めるかどうぢや、俺に王舍城の半分を與へるから修行を止せといふが如きは、娑伽羅龍王に牛の蹄の跡の水を飲めといふが如きものではありませぬかと言はれた。これは尋常の話ではない、一通りの學者にもこの意味は分るまい、悉達太子が唯だ大言壯語して娑伽羅龍王は牛蹄の水を貪るべけんやと言つたものではない、爾來三千年の歷史を經て今日になつて見れば、印度大國の王樣と雖も、佛經の中に取入れられて居る王樣の名前は纔に遺つて居るけれども、あとの者は滅びてしまつて名も傳はらない者である、一時の榮華は夢か幻と消え去つてしまつたけれども、獨り大聖釋迦牟尼世尊のお名は全世界の上に今も燦に祀福せられて居るではないか。して見れば娑伽羅龍王は牛蹄の水を貪らずと言つて王舍城の半國を斥けられしは、少しも大言壯語でなかつた事が分るのであります。

斯くして悉達太子は成道を遂げるのであります、が、その悉達太子が城を出られた晩には、太子の御母樣に代つて御養育なさつた僑曇彌といふ伯母さんがある、悉達太子のお母さんは、太子がお生れになつて一週間しか生きて居られなかつた、小さい時分

から母に代つてお育てなさつたのがこの僑曇彌といふ伯母さんである、この婦人が悉達太子が夜半に王城を出て山の方へ行かれたといふその後に於て、非常に泣き悲しんで居る、御殿にお居てになつたら立派な蒲團を敷いてお寢みになつたのが、山の中にお居てになつては蒲團を敷いてお寢みになるとも出來ない、お目が覺めたならばちやんとお手水の水も汲んで上げたし、御飯が出來ましたといつて差上げたが、お目が覺めても山の中では誰一人水を汲む者もなければ、御飯を差上げる者もなからう、雨が降つても雨具もお持ちになつて居らぬ、虻が來ても虻を逐ふ物もないのであるかと言つて、この僑曇彌が夜通し泣き悲しんで居る、太子の豐かな生活が急に山の中に入つての樹下石上の生活に變つたのでありますから、その生活の激變に對してこの女が泣き悲んで居るのであります。それも想へば誰の爲であるか、太子自身の爲ではない、一切衆生と稱せられる吾等の爲に、釋尊は生活の激變をも顧みられずに、樹の下石の上にお坐りになつたのであります。

その事はお釋迦樣自らも仰せられて居るので、此處にはお話すべき事は非常に多いのでありますが、お釋迦樣の有難い意味をお經に現れて居るのを以て見ますと、そこが能く分るのであります。華嚴經の如來出現品といふ、釋迦如來がこの人生にお生れになつた事を說いた一節の所に斯ういふ事があります

佛子よ、譬へば日の圓浮提に出づるや、無量の衆生皆饒益を得ん、所謂闇を破つて明と作し、濕を變じて燥かしめ、草木を生長し、穀稼を成熟し、虛空を廓徹し、蓮華を開敷し、行く者道を見、居る者業を辨ず、何を以ての故に、日輪普く無量の光を放つが故なるが如し。佛子よ、如來の智日も亦復是の如し、無量の事を以て普く衆生を益す、所謂惡を滅して善を生じ、愚を破つて智を爲し、大慈もて救護し、大悲もて度脫し、其れをして根力覺分を增長し、深信を生ぜしめて濁心を捨離せしむ、見聞を得せしめて因果を壞らず。

佛子よ、譬へば日月の時に隨つて出現するや、大山幽谷普く照して私無きが如く、如來の智慧も復是の如し、普く一切を照して分別有ること無きも、諸の衆生根欲の不同に隨つて智慧の光明種種に異なる有り。

譬へば日光出現の時。先づ山王を照し次に餘山を。後に高原及び大地を照す。而も日は未だ始めより分別有らざるが如し。善逝の光明も亦是の如し。先づ菩薩を照し次に緣覺を。後に聲聞及び衆生を照す。

譬へば淨月の虛空に在るや。能く衆星を蔽ふて盈缺を示し。一切の水中に皆影を現じて。諸有の觀瞻するもの悉く前に對するが如し。如來の淨月も亦復然り。能く餘乘を蔽ふて脩短を示し。普く天人淨心の水に現ず。一切は皆其の前に對すと謂はん。

お日樣が世の中に出れば、日の光に依つて大勢の者が利益を受ける、暗かりし所は明るくなるし、濕つて居つた道の惡い所も乾いて道が良くなる。或は着物を洗濯したといつても、梅雨時のやうに雨ばかり降つてじめ〳〵して居つたならば乾きはしないが、お日樣が出られることに依つて、その濕りが乾いて氣分が好くなるのである、一切の草でも木でもお日樣が出なければ、櫻の花も咲かぬてはないか、

米も實らぬてはないか、虚空ももや〳〵して居つて、お日樣が出られなかつたならば空を仰いでも氣分が好いといふことは言へないぢやないか。蓮の華も咲かない、道を往く者は眞暗がりて道が見えない、坐つて居る者は何の仕事も出來ない、暗がりては鼻を撮まれても分らぬ、左樣な譯て一つのお日樣が出られることの效果といふものは、實に大きなものだが、お釋迦樣が御降誕になつたのは、人類に精神界のお日樣が出られたので、これに依つて濕つた道も乾き、暗い所も光を得、草も木も花が咲くやうに、一切の罪深き人間も罪を免れることが出來るのてはないか、釋尊の御降誕そのものは實に太陽が天に出るよりも尚ほ人間の世の中には大切な事てあるといふことを言つて居る。これは華嚴經出現品の經文として、私は實に有難いことと考へたのてすが、いま一つ同じ華嚴經の入法界品第三十九の一に、神通王菩薩といふのが申して居る一節があります。

如來は大慈悲あつて。世間に出現し。
普く諸の群生の爲に。無上の法輪を轉じたまふ。
如來は無數劫に。勤苦して衆生の爲にす。
云何ぞ諸の世間。能く大師の恩を報ぜん。

釋迦如來はこの世に何の爲に出られたか、大慈悲を以て一切の者を救ふが爲に、その準備として自ら廣大なる功德を積んだので、難行苦行はたゞ迦毘羅衞城を出て山に入つた位てはない、その前の生、その前の生、その前の生、釋迦菩薩としてあらゆる功德をお積みになつて、如何なる者ても救ひ得られるだけの功德を積んて居られるのてある、阿彌陀樣が五劫兆載の功德を積んて人を救ふといふが、阿彌陀樣ばかりが救ふやうに思つて居るから間違ふ、釋迦如來が娑婆世界に出られる前には、如何なる者ても淸度し得る所の準備既に成つて出られたといふことを、この神通王菩薩が玆に言うて居る、勤苦して衆生の爲に救ひ得るだけの力を有つてお出世になつたのてあるから、その事を考へればこの御恩といふものは報じきれないのてある、釋迦如來の御恩は今度この世に出られてからだけの來てはない、出られる準備として一切の功德を積んてお居てになるのてある。それから又同じ入法界品の三十九の十九にも斯ういふ事があります、佛の有難いのは、恰も日の光が如何なる仕事をして居る者の所にても、田を耕す者にも或は家を造る者にも、道を往く者にも書物を讀む者にも、如何なる者をも日の光はこれを照すが如くに、釋迦如來はあらゆる方便を以てその人々に適當なる敎化を與へたのてある。前の出現品にもありましたが、月の光に向ふ人は自分の前にお月樣がちやんと出られて居るやうに感ずる、その通りに釋迦如來は吾等の爲には直接、その前に現じ給ふものてあるといふことがあつた、「普く天人淨心の水に現ず、一切は皆其の前に對すと謂はん」、この意味合を能く考へなければいかぬ、あなた方がお月樣を見たならば、お月樣が横の方から照して居るとは思はれないてせう、天を仰いだならば自分の眞前にお月樣が出られたと思ふ向ふの人が見てもやはり眞前に出られたと思ふ、京都から見ても大阪から見ても、横濱から見ても皆自分の眞前にお月樣があると思ふ、釋迦牟尼佛と吾等との間の關係は、丁度このやうなものてある、此處に釋迦如來が降誕せられたのは誰の爲に出られたか、大勢の爲に出られたと思つてはいかぬ、この誕生は自分自身の爲に、恰も月が面前に現れたが如く

に、釋迦牟尼佛は我を救はんが爲にこの人類に降誕し給ひしと考へなければならぬといふ事が說いてある。これは實に善い言葉である、昔の人はうまい事を言つて居る、今はそれ程の事を言ひ得る者が無くなつた、これは昔賢菩薩が言つた言葉であるが、實に私は善いと思ふ。その次の今の入法界品にもやはり同じやうに、日の光に對しても、今此處で本を讀んで居れば、太陽は俺に本を讀ます爲に光つて居ると思はれる、百姓が田を耕して居れば、俺が田を耕す爲に日は出て居ると思はれる如くに、一切經に依つて感化を受くる者、皆釋迦如來の光の有難さを直感する譯であると說いてある。この華嚴經にはこの他尙ほ澤山の菩薩なり神樣が出て佛樣をお讚め申上げて居るし、又大涅槃經にもいろ〳〵有難いことが澤山ある、法華經にもある、私は茲に一々書き拔いて來たけれども、餘り長くお話をしても却つて御迷惑の人もあらうと思ふから、お經文に出て居るいろいろの佛樣に就ての有難い事は、又他日申上げることゝして、最後に日蓮上人のお釋迦樣に對して仰せられた事を一言申上げて、この講演を終りたいと思ふ。

日蓮上人は斯ういふ事を仰しやつて居る。

如何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ、無一不成佛の御經を持たざらん。

「如何なる時節ありてか」といふのは、どんな事があつてもといふ事で、忙しいからとか、或は櫻が咲いたものだからとか、博覽會が開けたものだからとかさういふやうな事に依つて毎自作是念の悲願を忘れるといふ事は出來ないぞ、「毎自作是念」といふのは「毎に自ら是の念を作す」といふので、お釋迦樣は何時でも吾等を救はんが爲に、今も常住に在します、涅槃は方便の涅槃である、跋提河の邊りに入滅を告げ給ふと雖も、常住不滅の如來は今も現に此處にお居てになる、その佛が何時も大慈悲の光を放つてお居てになる事を考へたならば、櫻の花を見ても、唯だ花を見て「美しいなア」といふだけではいかぬ、櫻の花の間からそこに本佛の光が輝く事を見ねばならぬ、「櫻を見るのが忙しいものだからつい佛樣の事を忘れました……」といふのは法華經のお自我偈を讀まない人の言ふ事である、櫻を見に行けば、「アヽ綺麗だ」といふ時に、人とは違つて「櫻の花の間から佛樣の光を拜して一層有難く感じました」と言はなければならぬ。それを又日蓮上人は

暮れ行く空の雲の色、有明方の月の光までも心を催ほす思ひなり

と仰せられたのである、日暮に美しい空を見るにつけても、我が慕ふ佛樣は其處に御座るかと思つて有難く感じ、夜明にお月樣の夾やかな光を拜するにつけても、月の光は今目前自分の前にある、華嚴經に依れば、丁度月が自分の前にあるが如くに、本佛は常に我が前に立つて自分を護つて下さる譯であると思つて、有明方の月の光にも渴仰の心を催ほすといふことになる。これは暮れ行く空の雲の色と、有明方の月の光と二つを日蓮聖人は擧げて居られるけれども、上野の山の櫻の花を見るにつけても、鎭倉の濱邊に海の霞を見るにつけても、何處でも宜い、事に觸れ折に觸れて渴仰の精神を刺戟するのが、この降誕し給ひし釋迦牟尼世尊に對する所の吾等の感激といふものであらうと思ひます。どうぞ如何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れんや、暮れ行く

空の雲の色、有明方の月の光まで渇仰の思ひを催すと言はれた日蓮聖人の聖訓を忘れないやうにして戴きたい、それを覺えてお歸りになれば、今日の御降誕會にお出でになつた利益はそれだけで確かにあるのであります、どうぞ呉れ〳〵もこの點を御記憶の程を希望する次第であります。（完）

實學（中）

山根日東

「學問の道他なし其放心を求むるのみ」とは孟子の格言である。放心とは漂々と動搖ついて居る心のことで、假令一廉の智識才能を有するものでも、「浮萍や昨日は東今日は西」、少しも安定のない心の狀態を放心と云たのだ。其放心をばヲイ緊張せよと此方へ向き直させ、引締て確乎と安定ある事にしてやる、それが實學の實學たる所だ。現代の教育を見給へ、其定義からが成て居ないではないか、教育とは何ぞやとの問に答へて、「生活に必須なる智識技能を授くるを云ふ」と御意遊ばす、それでは人間が食て行く事に困らぬ程度に、智識なり技能なりを與ふるのみが教育の目的と云ふことになる、妙な結論ではないか。先帝の御詔勅に「智能を啓發し德器を成就す」と宜せられた事は何と思ふ、智能の方はマー現代の教育のやり方でも可としてからが、德器成就の方はどうする積りか、少なくとも片輪の教育を施して居る事になりはしないか。御詔勅の趣旨は智能を啓發すると同時に德器を成就せよとの思召で、其關係は鳥の雙翼車の兩輪須臾の間もひき離してはならぬ事になつて居る、又そうなくては一人前の人間に仕上げられない筈だ、云ふ迄もなく德器とは道德の器と云ふこと、人間を道德的に仕上げやうとの御教示だ。それをば其德器の方をば全然放擲して置て、智識技能をのみ授ける、何と云ふ片輪の方針だらう、此教育方針から生み出された現代人の混迷俗惡、そは寧ろ當然ではあるまいか。活きた學問活きた學問一つ本氣になつて諸君と共に此活きた學問の興隆を企圖せなくてはなるまい。

支那の孔子は一日小河のほとりに立ちて水の流れを凝視して居られたが、その滾々として流れて止まざる水の狀態に不圖ある感興を惹起し、晨朝行き晝間行き夜分提燈を點けてまで之を凝視された、處が幾回之を見ても水は不斷に滾々として流れて止まない、成程此處だと非常に感激せられた、人が一生の事業を遂行するのも是でなくてはと、爾來一層奮勵努力而も躁急らず惑はず諄々として敎えて倦まず、國家民衆の爲に德教の宣傳に全力を傾注された。谷川の水の流れ开は何てもない樣なものだが、宇宙の大自然に接觸して心を留めて之を見れば、其處に幾萬卷の書籍を讀破したよりも、より以上の感激發奮を齎らし得る事になる。

傳教大師が小僧最澄の時保津川の高瀬舟の船頭がその急流を引綱で牽き上げつゝある現狀を見て、非常に感激せられた。一度精神に緊張力を失つたが最後舟は見る間に逆戻りをする、「ホラーホラホラー」の掛聲勇ましく調子を揃えて努力奮鬪の結果、美事

激流奔濤を凌ぎ切て荒瀬の上流に漕ぎ登せ得る。成程これだな、學佛の徒油斷は大敵イデ此意氣てと、發奮遺進遁れ桓武嵯峨の兩帝より師の御房と仰がるゝ大聖者となられたのてある。

書聖小野道風が御殿から下る道すがら、雨中高足駄て池邊の柳の枝に飛びつく蛙を見て居たが、何度も何度も失敗失敗亦失敗、妙な蛙もあつたもの隨分と根氣がよいなと思ふ内、何百回何千回熱心は恐しいもの、美事柳の枝に登り得て目的を達した。道風覺へず大勝利萬歳と叫んだかどうだか开處迄は知らんが、兎に角衆て惡筆の道風先生、師匠から百萬陀羅の叱責教呵を受けても兎角に上達が六ヶ敷、他は一生涯惡筆兵衛景清で終るのかなと、ほと〳〵自分の惡筆に愛想をつかして居た身が、此蛙君の飛付藝當に感奮して、成程これだ俺の熱心が不足だつたなと、發奮興起晝夜兼行幾十年やがて本朝三筆の第一人者となり得たのてある。雨に柳坊主の二十ウンあれかとおなじみの八々を思ひ出して夢中になるのは眞平お斷り、自個の仕事に全力を打込んて、能率增進を心掛ける樣しなくてはならない。

日蓮聖人が幼童善日麿と呼ばれた當時、房州小湊の磯邊に友の一小童が雀の子を籠に入れて愛育せるを見られた。親雀は攷々と餌を運んて來て小雀に與へる、小雀は嬉々としてそれを樂み待つて居る、其何とも云へぬ温かい動作に、雀だも猶ほ斯の如し況んや萬物の靈長たる人間をやとの感激に滿され、時々之を見舞つて居られた。處が一日隣家の登辯猫が隙を覗つて其子雀を横咬に咬えて逃げ去つた、親雀は悲歎に沈んて狂氣の態となる、友の小童は憎くき猫奴と逐かけ廻したが、畢竟あとの祭り無念殘念と絶叫するのみとなつた。善日麿は前後の光景に一段の感興を惹起された、さても憐然の子雀よな、憎さも憎き登辯猫よな、世の中は總て斯んなもの、惡魔は常に善良の行爲に邪魔をする、單に通り一遍の親切計りが能てはない、時に降魔の利劍を振はざるべからずと、小さき胸に無限大の慈悲の嫩芽を萌された。

實例は幾何てもあるが、兎に角理窟はぬきにして現實とかけ離れない否寧ろ現實に即した、安定不動の活きた學問を脩める樣に心掛けねばならぬ。

鍋かぶり日親映畫

封切會の大盛況

六月二日晝夜二回京都市公會堂に開催せる日蓮主義宣傳活動寫眞株式會社第一回製品全十卷壹萬呎の大寫眞「鍋かぶり日親」封切會は一等三圓二等二圓三等一圓の入場料なりしが晝夜二回共滿員、村雲尼公を始め河合日蓮宗管長各本山貫首の各殿下並に各山の御住職舊女官の方々高位顯官等無慮四千七百七十一人の入場者、殊に夜分の如きは七時半より入場を謝絶したる程の大人氣、大阪も六七の兩日に亘りて中央公會堂に晝夜四回開催したるが入場料は京都と同額にて入場者は五千百五十四人、權藤中將閣下の講演等ありて大盛況なりき、尙會社の宣傳隊は前記封切會の外三隊に分れて、既に丹波の須知町を始め綾部町山城の向日町、鳥羽播磨の田野、伊賀の上野、丹後の新舞鶴舞鶴宮津口大野、加悠峯山、綱野、日置、其他但馬の豐岡園阪田岩其他因幡の鳥取、伯耆の八橋、米子松崎、橋津、其他雲州の平田、今市岩見の太田温田温泉津等に應翻映寫しつゝあるが各地とも一日乃至三日間にて殆んど全部が入場料を徴する映寫會なるにも拘らず入場者一回八百人を下らず大低千人以上千四五百人位中には二千人三千人の所も少なからざる由尙目下加賀の金澤を始め約五十箇所百餘回の招待を受け居れる好況なりと、因に同會社は敷訪町松原の假本社にて營業しつゝありしが愈々本會社出來せしにより七月十二日より京都市高辻通柳馬場西入泉正寺四五七番地へ移轉の由

日蓮主義より見たる無量義經　第二回

井村日咸

本經譯譯の年時

此經の譯譯は支那南北朝對立の時、齊の高帝建元三年（西暦四百八十一年）廣州の朝庭寺に於て、曇摩伽耶陀舎の譯出せるものである、今茲大正十一年を距ること壹千四百四拾貳年前である、羅什三藏が法華經を譯譯してから七十七年後れて譯譯せられた、而して譯譯せられてから直ぐに弘まらずして、永明三年に到りて武當の惠表比丘初めて之を傳受し揚都に齎し來つて廣く流布せしめたと云ふことであります、此外に別譯が一本あつたと傳へられてはあるが、今は傳はつては居りません、此經の註譯は支那にては劉斡居士『註無量義經』と云ふがあつたと文句記に見へて居りますが、現今は無い樣である、現存せるは傳敎大師の『註無量義經』計である、日本大藏經の中に貞慶の開示鈔と云ふがあるが、枝葉の事二三の解釋がある計りて、纒つた註釋書では無い、外にも二三あるが同樣である、今は傳敎大師の『註無量義經』を參考としてお嘶致さうと思ふ。

今經の說相と佛敎敎觀の大綱

先づ今經の說相を一應申上げねばならぬ、此經は德行品、說法品、十功德品の三品に分れて居る、德行品には、菩薩と聲聞と佛陀との三者に就て其德行を歎美した中に、聲聞は至極簡單であるが、菩薩と佛陀の二者に就ては比較的詳細に其德行を記述した、菩薩の德行は此經の編輯者としての記述にして、佛陀の德行は大莊嚴等八萬の菩薩の讃佛の偈である、今品には佛陀の說法は少も無い、說法品に至つて大莊嚴等の菩薩は佛に疾く無上菩提を成ずるの法ありやと問ひ奉り、佛は一法門あつて疾く無上菩提を成ずることを得と答へ給ふた、次て一法門の名を明し義を明し、如何にして修行すべきやを明されたが、其に就て、過去の諸經と今經と其言辭を同ふするものがあるのに、世尊は、何故に此經のみ菩提を成するの法なりと說き給ふやと疑ひ、如來は文辭一なりと雖も而も義各異れりと答へて、其意義に於て頗異あることを述べられた、此答の意味は敎法の淺深に依りて所說の理に差別あることを說かれたのであつて、敎法に關する大切な問題である、此品に明した敎法觀は無量義は一法の根源あることゝ、敎法の淺深に依りて所說の理に差別あることを明した二點である。

次に十功德品には先づ初めに菩提に進趣するの道

に大直道と迂回道と別あることを明し、大直道は疾く無上菩提を成ずることを得るも、迂回道は終に無上菩提を成ずることを得ず、汝等當に迂回道を捨て大直道に就くべしと宣示し、次に大莊嚴菩薩は此經は何の處より來り、去つて何の處に至り、住つて何の處に住すると問ふて、如來は此に答へて、此經は本諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、住つて菩薩所行の處に住すと答へられた、此一段佛法の行法に就ての最大重要の教義を御示に相成つたので、甚だ簡單な御說明ではあるが、佛法修行の要諦は此來至住の三字の中に其全部を包容せられて居るのである、次に十功德を說いて此經を信ずるものゝ得益を十種に分別せられた、此十功德の中に現在と未來とに亘つて分滿の利益を說かれて、其修行の程度に依り大小の果實の得らるべき事を示された。已上三品の中に示された重要教義を纏めて見ると、

德行品　菩薩の獻德……人身觀
　　佛陀の獻德……佛陀觀
說法品　教法の根源……教法觀
　　文辭雖一而義各異……理法觀（宇宙觀若は法界觀）
十功德品　來至住の三義……行法觀
　　十功德……得益觀

と云ふことになる、此三品の中に顯はれたる教義が、宗教學上に於て研究せられて居る重要なる題目の凡てを含蓄して居ることが、其類が尠ないのに、更に其說道の順序が整頓して居ることが誠に珍らしいのである、宗教學上に重要の教義と云ふは、先づ宗教發生の根源たる超人觀と人身觀とである、宇宙を大別して迷者と悟者とに分ける、迷者ありて救濟を求め、悟者ありて之を救濟せんとする、其處に宗教が出て來るのである、迷者計であるならば救を求むるもの丈であるから宗教とはならない、悟者計であるならば救ふべきものが居ないから此又問題とはならない、迷者と悟者とが對向して居る處に救はう救はれやうと云ふ事になるのであるから、迷者たる吾人の如何なるものなりやと云ふことゝ、悟者たる佛陀は如何樣なものであるかと云ふことを先づ最初に研究せねばならぬのである、迷者たる吾々は果して救はれ得べき素質ありや否や、若し救濟を蒙むるべき素質を有せずとせば最早其處で斷念して仕舞ふより外は無い、救濟を受けて向上すべき素質ありとせば進んで救濟を受けねばならぬ、其點を第一に定めて置いて、彌〻救濟を受くるとしたならば誰人に依つて救はれやうか、誰人が吾人を救濟するに十全の力を有せらるゝやと云ふことを取調ねばならぬ、降の婆さんの噺や世間の噂に依つて自分が救濟を受くべき人を求めてはならぬ、充分に愼重の態度を以て、我が救主を求めることが宗教信仰上の最大重要の一條件である、吾人が最初に研究せねばならぬ二要件を今經の第一德行品に說いたのである、菩薩とは佛道修行に志して居る人で、未だ迷へる人達である、我々迷へる人達の代表者としての菩薩の德行を獻じて、立派に佛陀の證得に到達し得る素質ありと斷じたのが、德行品の前段である、後段の讚佛の偈は、我等を救ひ給ふべき佛陀の實體と其相好と證得の內容を說き、進んで其力用を說き、吾人罪深き衆生を救濟するに十全の佛陀なりと示されたのである。

次に宗教上の重要教義は、悟者が吾人を救濟するに就いては教を說いて衆生を導き給ふ、經に說法教

化と說き給ふた、法を說くと云ふ其說法が即ち如來の敎法である、敎法の中には、我等が求むべき絕待の理法があらねばならぬ、敎法の中に理法がなければ袋丈で中味が無い事になる、理法があれば其理法を悟る方法が無ければならぬが、先づ其根源となるものは理法である、敎法と理法とに就いて吾人の研究すべき事柄を今經說法品第二に詳細に示されたのである、如來所說の敎法は無量義ありと雖ども一法の根源より出てたりと示されて、一法の源に立還り枝葉に囚はれざるべき樣示された、其理法に就ては無相の法ありと示されて、其無相の法に迷ふ我他彼此の差別の念を生ずるもの此即ち迷なりと敎へられたのである。

次て宗敎上の重要問題は行法と得益である、敎を說いて理法を示し、吾人の進むべき方向を明示せられたならば、此方向に進趣せねばならぬ、此進趣するを修行と云ふ、即ち實行である、敎法は理論である、行法は實行である、實行があつて始めて敎の價値が實現せらるゝ、實行するならば必ず其實行に對する效果があるに相違ない、其效果を得益と云ふのである、此得益を得せしむるが、悟者說化の目的である　吾人迷者も此得益を得て迷界よ。脫出せんとして敎を求めたのである、得益は宗敎信念の果實であり、歸結する處である、今經十功德品には前段に行法の總要を簡明に示し、後段に十巧德を明して其得益の相狀を示して、現世相待の益より進んで佛果成辨の絕待の利益を得せしむることを說いて居るが、全く其目的を完成したる程度迄示されたのである、斯樣に此經三品に說示せられた處が、宗敎上に於ける重要敎義を殘す處なく說示して居り、且つ記述の順序が宗敎問題を研究するに就て最も要領を得るに容易き樣になつて居るが爲に、吾人初心のものゝ研究に便すること多大なりと信じて本經を講ずるに至つた次第であります。

記事

徹底的な寺の民衆化

常德寺住職の英斷

現寺を移轉しその跡へ二千五百人收容の會館初め食堂、講堂、圖書館、市場等を設ける

（名古屋新聞より轉載）

市內中區新榮町常德寺國友日斌氏は今度同寺の建物を東區田代町城山に移轉せしめ社會事業、敎化事業等に努力すべくその跡地に會館を建設するといふ計畫を立て目下墓地の改葬準備に着手してゐるがその計畫によれば本館は總坪數二百五十坪で約二千五百人を收容する講堂及び附屬室を有しその奧には敎化運動にもまた儀式法要にも當て得るやうな本堂を附設し、更に社會事業として三十五坪の簡易食堂及新聞縱覽室、七十坪の民衆講堂、七十坪の私設廣賣市場、五十坪の民衆浴場、及び中產智識階級の獨身者の爲めに百五十坪のアパートメントを建設するのださうで、これ等の敷地を除いた殘りの千二百坪を貸地として相當の價格で主として高等な遊戲場、娛樂場の營業者に貸與して年の收益約二萬圓を得やうといふので、この收益を以て社業事業、敎化事業を經營する資源に充てるといふ目算ださうである。右に就き日斌氏は語る。

『どうも、衣、食、住難、殊に住宅難の聲の高い大都市の中央に廣い境內と大きな建物とを有して、年中始ど何の使用にも供しないといふ今の寺院の狀態は、實際現代に於ける大きな矛盾の一つだと思ひます何うしたならば寺院が本來の職分を發揮して敎化運動、社會事業に活躍し得るか、これが今度の計畫の根據なのです、そして先づ現在の常德寺を日蓮主義中興の英僧で、常德寺の開基常樂院日經上人に因んで常樂寺と改めて城山に移し、そして壯嚴な儀式を營むに足る大道場と靜寂な墓場とを作り、そちらで充分寺院としての價値ある建物を作り跡敷地の會

館は一般に公開して大いに社會の爲めに奉仕しやうといふ心算です。かうした移轉及び會館の建設費等は現在の常德寺所有地の一部を賣却して支辨する筈です』云々。

各地の思想戰

統一國法戰錄　三月四日土曜講演「開目抄」木村日保師、「法華經講義」井村日咸師。△五日日曜講演「耐聽の覺悟」高木日靖師、「懺悔滅罪に就て」武田顯現師、「聖訓摘要」本多日生稅下。△十一日土曜講義「開目抄」木村日保師。△十二日日曜講演「宗教の擯棄と信仰意識の根本中心」安田台城師、「具足の道（其二）」木村日保師、「聖訓摘要」本多日生稅下。△十八日土曜講義「法華題目抄」栗原顯有師「法華經」井村日咸師。△十九日日曜講演「聖日蓮の人格」長谷川義一師、「實生活と信仰」栗原顯有師、「日蓮上人の本領と面目」荘川日堂師、△廿五日土曜講義「怪異禁戒經」安田台城師。△廿六日日曜講演「法華經の佛陀觀」大川孝準君、「佛教の本質」大森日榮師、「日蓮主義文化基準」野口日主師。△四月一日土曜講義「法華經」井村日咸師△二日日曜講演「社會生活と吾人の使命」鶴澤恭道師、「日月と蓮華」高木日靖師、「聖訓摘要」本多日生稅下。△八日釋尊降誕會「釋尊の大恩」本多日生稅下。△八日土曜講義「開目抄」木村日保師。△十五日土曜講義「法華經」井村日咸師。△十六日日曜講演「現代文藝と宗教思想」安藤乾陶君、「此師此弟子」小西日寛師「時代教責の方針」關田日城師。△廿二日土曜講義「開目抄」木村日保師、「法華經」井村日咸師　廿三日日曜講義「日蓮上人の出現」田久保忍君、「日蓮の發心」高木日靖師、「父我等を救ひ玉ふ」森川日修師。△廿九日土曜講義「開目抄」木村日保師、「法華經」井村日咸師。△卅日日曜講演「人生の光明」鶴澤恭道君、「以和爲貴」木村日保師、「聖訓摘要」本多日生稅下、△五月六日土曜講義「開目抄」木村日保師　「法華經」井村日咸師△七日日曜講演「生死長夜の大燈明」栗原顯有師、「赤化の惡酒亞に顧みて」能仁事一師、「佛教大觀」本多日生稅下。△十三日土曜講義「開目抄」木村日保師、△十四日日曜講演「供養の意義」中野信良君、「節制の基本」安田台城師「日蓮の光と力」荘川日堂師。△廿日土曜講義「開目抄」木村日保師、「法華經」井村日咸師。△廿一日日曜講演「欲求」板倉美之君、「鬼神の談」秋山乾英師、「本尊に對する信仰及菩薩行」野口日主師。

巡回教化　四月十七日午後七時淺草區橋場町福島方に於て開催（聽衆百五十名）法要嚴修後講演「乃木將軍」木村弘夫、「信は證明」北村桂之助、「精神修養」秋山乾英、△五月十八日午後八時品川町妙蓮寺に於て　開催（聽衆四百五十名）、「信は智慧の種」高木日靖、「國史の上より見たる日蓮」大谷內越山、△二十一日午後八時千住三輪町於梅澤方開催（聽衆八十名）法要勤修「偉談教化」秋山乾英、「日蓮上人」高木日靖、「義理人情信念」荘川日堂。△二十二日午前十時品川町蓮來館に於ける警官家族慰安會講話「國民活動の基本」荘川日堂、「感激の實現」、大谷內越山。△二十日日本橋兩國公園鈴木屋に於て「佛教の正系と大信力」三上義徳師。△二十七日月島慈後園にて「信の內容に就て」三上義徳師。△六月一日原宿門倉宅にて「人の身と世相に就て」三上義徳氏の熱誠あり强烈なる信仰を喚んで遂に宗を改めたるものありしと云ふ。

京都活動史　一日於本山國禮會修行後講演「安心の秘訣」土持良道師。△同日夜健兒會例會山田主事、有田會長の童話ありたり。△二日夜護正會例會「死に就て」小林啓善師、「日蓮主義と起生」有田宏道師。△六日夜健兒會例會「三人乞食の豫言」林玉光君、「天正時代の供客」高岡利七君、「義鐵の塚」土持副會長。△八日妙滿寺塔中威就院に於て護正婦人會例會「日本婦人の任務」有田宏道師。△同日夜同東西寺町本正寺に於て第二樂會例會「法華經の人身觀」大川孝準師、「人類最高の幸」土持良道師。△十日妙滿寺塔中大慈院に於て法王婦人會例會「意義ある信仰」土持良道師、「鞍馬山項信仰實驗の一端」松聽妙明師。△十一日健兒會例會京都旭子供會の主任辻本氏來會せしに依り一席の童話を依頼す外に二木、林兩氏の童話もありたり。△十三日於本山宗祖會嚴修後講演「女人成佛論」森原本山部長。△十六日健兒會例會山田、小林、中村、二木の各氏出演。△廿日夜健兒會例會。△廿一日午後一時より本山に於て國光婦人會第一回總會を開く一時半より管長大僧正本多日生稅下の導師のもとに會員各家先祖累代の大法要を營み終りて舊顧問金光師新顧問有田師並に法光院新住豐田師の挨拶あり直に稅下の御臨席を迎ぎ「婦人と法華經」管長本多稅下の御親教に婦人の有する長所短所及法華經に顧れたる婦人の眞價を論じ、說き去り說き來り萬座の婦女子は何れも感涙の淚にむせぶ、後藤演女史の薩摩琵琶餘興あり何れも盛會裡に午後六時半散會、△同日七時半より本山講堂に於て「親書要文講義」本多日生稅下。（聽衆約三百名）▲廿六日夜健兒會例會。△廿八日本山に於て開山會嚴修後講演「佛教の本質」豐田通泰師。△十五日夜境町押小路中澤宅に於て家庭法話「人生の眞意義」有田宏道師。

神戸の奮闘　四月十五日三菱電機會社千五百名、「尊敬すべき勞働者。」△同日神戸製鋼所一千名、「日蓮上人と今の日本」。△十七日三菱內燃機千二百名、「修養と德敎」。△同日三菱造船所四千五百名、「志を尙ぶ」。△十八日三菱造船所五千名、「尊敬すべき勞働者」△同日神戸製鋼所千二百名、「成功者の模範」。△五月十九日三菱電機「思想戰の覺悟」。△廿日三菱內燃機「人格と幸福」。△廿二日三菱造船所「愚なる思想」。△同日神戸製鋼所「先づ敵を知れ」△廿三日三菱造船所「先づ敵を知れ」。△同日神戸製鋼所「愚なる思想」。△同日於淡路倶樂部「親書要文講義」。以上本多稅下御出演。

全澤通信　五月三日於別所氏宅「同會之誓」石橋會草師、「佐前佐後の相違」木郷常次郎氏。△六日於松永氏宅「法華經の心髓」石橋會草師、△七日於鳥村氏宅「信仰に就て」宮田純榮師。△十一日於木林氏宅「成佛の直道」宮田純榮師。△十八日於宮崎氏宅「伊豆流罪」木郷常次郎氏、「法華題目鈔の一節」宮田純榮師。△廿二日本長寺例會講演「法華色讀の行者」木郷常次郎氏。△廿三日於北川氏宅「身延隱栖」木郷常次郎氏、「利益の信仰」宮田純榮師。△廿六日天晴會講演「法華經方便品概說」宮田純榮師、「念佛無間論」石橋會草師、「釋氏宮法を讀む」木郷常次郎氏、「日蓮主義の信仰」小島由之助氏。

久留米敎報　三月三日久留米天晴會講演「鄕土の偉傑を偲ぶ」中原法學士。△五日正信會「信敎の基準」中原山主。△十二日同信會「日蓮聖人の敎法」中原山主。△十八日「四妙成就（其一）」中原山主。△同

夜天晴會」折伏すべき社會」南島氏、「立正安國論の現代的觀察」中原龍巳氏、「法華經要義」中原山主。△十九日地明會「信仰感話」藤本氏「修人の為むべき路」中原法學士△二十日「四法成就」（其二）」中原山主。△二十一日本泰寺後援法會講話「四法成就結講」中原山主。△二十四日妙經寺後援會「宗教の本質と行果」中原通應。△廿一日久留米長門石青年會堂に於て、處女會春季大會。「開會の辭」青木校長「建設より持續へ」中原布教師。△久留米天晴會の遠征……四月二日天晴會が柳河にも生れた、久留米天晴會宣傳隊は發會の產聲を擧げた柳域へ、悅び勇んで見舞つた、そして雄々しい聖途に立つて惡魔の軍陣を擊退すべく法彈を敵陣へ投じ幸に首尾能く凱歌を奏した。「開會の辭」（柳河裁判所書記）吉永賢、「聖語捧讀」小泉國應、「我が主義」（久留米天晴會員）永田義雄、「努力としての勞力」（同會幹事）平木秀雄、「現代教育批判」（法學士）中原龍巳、「分裂より同體統一へ」（布教師）中原通應、「閉會之辭」（天晴會幹事）新開新八。△四月八日妙經寺例月講話。△五日正信會△十二日同信會。△十五日久留米天晴會「日蓮聖人を慕ふ」新開清八、「法華經より觀たる女性」中原法學士、「法華經要義」中原山主。△十六日地明會「信仰と德義」中原山主。

大牟田教報

大牟田市日蓮主義天晴會にては去る五月廿日筑後國浅瀬新興寺に於て同地護仰會主催新興寺後援のもとに思想講演會を開催し大いに法鼓を鳴らし邀には稀なる盛會なりき。「天職を自覺せよ」山田健祐、「人間味」廣木精治、「有感」山本幹事、「平凡の教訓」中河原幹事、「感恩の生活」藤好良右衛門、「人と教え」針貝與三郎、「開會の辭」護仰會幹事河野隆。

神奈川縣教報

五月八日飯田本興寺、「信徒としての超守彌三郎」。△十三日横濱伊勢佐木町警察前道路に於て大日蓮主義を高唱す△十九日本牧修道會「信力とパン問題」。△二十二日水天宮前道路宣傳に於て聽衆約二千五百餘の論客をなす「現代思想の惡性開顯は日蓮主義に存す」△二十五日鎌倉停車場前に道路宣傳をなし直ちに信仰に入るもの數名ありたり。△二十八日飯田本興寺に「本經に依れ」と云ふ要旨を說いて迷妄の信仰を斥く何れも人心何ものかを求めつゝある時代なれば其肆論によりて佛性に反響を與ふるものありしなるべし開縣は本宗に於て三上義徹師一人の活動あるのみにて更に宗門的に結束後援の暴あらば一段の好成績を得べきなり。

千葉通信

四月八日千葉統一團支部講演會道路布教團員小島洗明成昌隆康吉見俊教江野澤親全の各師午後七時より「四方成就」小島洗明師「信仰の威力」井村日成師。△十五日濱野木行寺に於て「久遠本佛と我等」大橋日曉。△十八日千葉市片岡支店に講演「信仰」大橋日曉。△廿二日統一團千葉支部の講演、道路布教團員堂亮雄、米倉義明、渡邊日命の各師午後七時より講演。「命」渡邊日命師、「因果律に就て」關田日城師。△廿七日山武片貝妙覺寺に於て講演「五果に就て」大橋日曉△廿八日午前三時開宗記念法會關田日城師大導師として千葉統一團支部に於て出席信員は堂大橋松山其他數百の信徒の唱題力說せり。△五月四日濱野木行寺降誕會の講演「佛の慈悲」大橋日曉。△十三日千葉支部の講演午後二時道路布教團員北田信昌、土屋堅生、加藤義準。山田誠心の各師。午後七時より講演「眞の解脫と法華經」土屋堅生師、「理想と實際」井村日成上人。△廿八日千葉支部の講演會午後二時より道路布教團員土屋眞容、堂亮雄、鈴木正二、中島元道伊藤寛隆の各師午後七時より「予の信仰より觀たる國體」土屋直容師「日蓮主義の振興」荏川日堂師。△六月四日千葉市院內山口京太郎宅講演會「鏡に向へ」山口智光、「國の惡」神谷本善、「女性觀」大橋日曉。△八日山武郡片貝小關妙覺寺に於て講演會「眞言亡國論」大橋日曉。△十日千葉支部の講演會午後二時道路布教團員高貫慎一、山田誠心、野口海印、金坂乾受、午後七時より「法華經の特長」高貫慎一師、「佛子自覺」井村日成上人。△十八日千葉市片岡支店の講演「會信の一字」大橋日曉。△五月二十八日房總線土氣驛に於て同縣員に對する修養談あり。「責任觀」荏川日堂。△同日於本藤寺第五教區會員に對する講話あり、「人格と教化」荏川日堂。△同日、於本藤寺青年團の修養談あり、聽衆百有餘名、「宗教の本質」濱口會旭、「形式と實行」荏川日堂。土氣町に於ける法雨の法ひは濱口師の大努力にて意外の發展をなし當年は十數回の講演を開催したるお同一回と青年の熱誠は向上し感通大王語の法悅を味へり。△五月四日於常覺寺釋尊會擧行す、「お釋迦樣」中島元道師。△同日兒童會發會式（常覺寺に於て）並に釋尊降誕會花まつりを擧行す、「お御廟」中島元道師。余興として福引等あり。△四日夜常覺寺に於て青年會例會「釋尊を慕ふ」中島元道師。△八日夜常覺寺に於て題目講「日蓮聖人露」中島元道師。△廿六日夜常覺寺に於て青年會例會「新宗教に對して」中島元道師。

千葉縣佐倉町妙經寺入佛
供養並記念大講演

千葉縣佐倉町妙經寺に於ては大正五年の大暴風雨に遭遇して以來堂宇の頽廢甚だしかりしが、我て九千六百有餘圓を投じて一昨年より大改造に着手し工事中の所今回漸く落成し百日一新堂々たる伽藍となるに至り、五月四日入佛供養並に紀念大講演會を開催したり十數日に亘る不眠不休の諸事の準備と稀なる好晴の天候と、加ふるに現代宗教界の偉人たる本多大僧正猊下の御親修のことなれば、近縣近在の信徒四方より雲集し佐倉未曾有の大盛況を呈せり。左に其の概況を記すべし當日境內には露店さへも張られ參詣の客早くより押しかけ式前既に數千に達せり。午前九時開會高貫見龍師先づ講演あり次で布教師實藤日章師は「現代思想觀」、野口權大僧正は「思想問題と改造文化の基準」の題下に熱聽を振はる。十二時七分に至るや管長猊下佐倉縣に到着せらる。停車場には教區會員檀家總代其他の提信徒等率迎し、愈よ寺に向はんとするや行列の先頭には花を飾れる大萬燈を押立て區內各寺の題目講中は玄題を記せる大旗を掲げ囃子太鼓をたゝいて之に續き、次で丘山村丹尾鶴岡魔太郎氏の寄附にかゝる同村小野の獅子連中は馬車に打乘り笛太鼓の囃子面白く賑かに練り行き約一時間の後寺に到着す、沿道は數萬の見物人にて埋まり行列は實に美觀なりき。斯て午後二時管長猊下には大衆を隨へ、大導師として入佛供養の大法要を謹修し、親しく慶讚文を朗讀せらる堂に溢れたる參詣者は一時に鳴りを沈め、隨喜の信徒より發する唱題の音聲はいとも高らかに袈裟即寂光の由現を思はしめたり。式後猊下は「教の恩人」の題下に滿堂の信徒に對し懇々として慈愛溢れたる御親教あり、數千の參拜者隨喜感泣せざるはなかりき。講演は相次で夜に入り高木日靖師は「まことの我」、野口權大僧正は「心を九識に持ち行を六識にせよ」の題下に有益なる法話あり。會餘興として獅

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

子舞茶番等數回の狂言あり、境内を埋めたる群集十二時過に至り漸く閉散せり。町内の人心は恰かもお祭の如く實に空前の賑ひを呈せり。祝下當日本堂に御臨場の際位牌所を御覽ぜられ「斯の如く祭頓せる位牌所は全國に無しと賞讃せられたり、以て建築の一參考とするに足るべし。當寺は等級低く資錢にてもあり、以前には且つて經營困難とせられ居たる所なるに今日堂々たる建築となりしは住職四遠僧一師の苦心察するに餘りあり、又檀信徒の少數なる割合に寄附金の多額なりしも他の模範となるべしとて茲列せるもの皆賞讃せざるはなかりき。

慶讃文

謹奉勸請開基顯本法華經中常住一切三寶護法護國之諸天善神來臨影向悉地照覽伏惟大恩教主釋迦牟尼如來久遠劫來所作佛事未曾暫廢三世十方周遍利益就中憐我娑婆世界衆生計時出現先示三乘後說一乘法華之妙教一代化導利益無量華嚴經說教釋尊之出現日譬如日出圓浮提無量衆生皆得饒益所謂破闇作明令變過惡生長草木成熟穀稼令虛空則數速華行者見道居者將樂以何故日輪普放無量之光故佛子如來智慧之日亦復如是以無量事普益衆生所謂滅惡生善破惡爲智大慈教護大悲成就令其增長根力覺分生深心捨離測心令得見聞不壞但是佛子譬如日月隱時出現大山幽谷普照無始如來智慧亦復如是法華經云世尊大恩以希有事滅惡教化利益我等無量億劫誰能報者爲信佛教者拜此文讃不感激釋尊入滅後大法東漸就中法華經者自聖德太子傳教大師至我日蓮聖人利導我文化利益我國民頗大也日蓮聖人之教益遍及今日億兆萬人我國祖日什正師綱法統護正義爾後歷代先聖各慈設學能與隆三寶今日我等得正信成悉地皆是無不佛祖先聖之洪恩故佐倉於經寺之創建面屬日受上人之開基爾來歷世代二十二現當田邊僧一師住職當寺千今十有三年檀信徒協力悉寺門興立完了本堂庫裡大修繕以本日修入佛供養大法會是實寺檀淨信之發願爲佛祖之洪恩也日蓮聖人示日興吉法興吉師與吉權那此三寺合成就所宜流布所願可拂國土之大難也仰願佛祖三寶納受寺檀之願衷成就所願南無妙法蓮華經。

大正十一年五月四日

顯本法華宗管長　大僧正日生

廣告

今回名古屋市中區新榮町常德寺を、同市東區田代町字城山法道寺に移轉合併の上常樂寺と改稱致しました（但し自分共の住居はやはり從前通り新榮町四丁目十五番地であります）そして記事欄に記載した如くに色々な社會事業を計畫する筈であります、どうか法國の爲に此事業の完成に十二分の御援助を祈ります。

大正十一年六月二十二日

名古屋市中區新榮町統一調査局に於て

國友日斌
川島常照
外同人

○移轉廣告

小稍義本山執事法光院在職廿ヶ年間勤務誠在候處今回左記へ移轉致候に付此段謹告候也

大正十一年七月

京都市川東西寺町二條下ル　本正寺

金光孝顯

ん舍利弗、復說くべからず」――それ故にそれを順序立てゝ說かうとしても說き盡せるものでないから、それは止めた方が宜からう、モウ說かないで置かうと思ふ。「所以は何んゝ、佛の成就したまへる所は第一希有難解の法なり」――それは餘りに偉大なる敎であるが故に、汝等の爲に說くといふことはどうも難かしい。「唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり」――佛同士が寄つたなれば肯き合つて判ることぢやけれども、佛以下の者に對して之を說かうとしても非常に困難なことである。それはそれに違ひない、この尊い宇宙の實相を未だ覺らない者に對して了解を與へやうといふことは、酒を飲まない者に酒の旨さを說明するといふか、琴を習はない者に琴の微妙な所を話すといふか、極く卑近な事でも學ばざる者にその妙處を敎へんとするのは難かしいものである。繪なら繪を少しも習はない者に向つて「繪は斯ういふ所が大事だ」と言つて見た所が、中々了解の出來ぬことである。況んや宇宙の眞實相を語らうとするに就て、如來が躊躇して復た說くべからずと言はれたのは、如何にも尤である。けれども如來は慈悲の心に促されて、この儘止すことは出來ないから、段々後に往復を重ねて遂にその眞實を詳細に說くに至るのでありますが、今は僅かにその眞實の一部を說明した。諸法の實相といふ言葉をいうた序でに、これはどういふ事かと言へば「諸法の如是相乃至如是本末究竟等」であつて、十種の事柄に依つて諸法の眞實を見て居るものである。この十種の事柄から天台が一念三千の敎を廣く說いたのでありますが、簡單に言へばこれは種々の相と性質と原因結果の關係とを現して來たものであつ

て、いろ〳〵の宇宙に現れて居る現象の世界に於て、それの原因結果の關係を明かにして行くのが十如是の精神であります。併しこの事は今少しく詳しく語らんければ、方便品のこの文を講じたといふ事にはならないので、殊に天台がこれに依つて『摩訶止觀』といふ非常に大きな書物を書いた位てありますから、進んてその事を申上げて見やうと思ふ。

この方便品の十如是は、天台智者大師が一念三千を說明せられた根據となつて居るのてあります。併し日蓮聖人の御遺文に依れば、一念三千の出所は十如實相の文てあるけれども、義は本門に限ると言はれた。又開目鈔に於ては「發迹顯本せざれば眞の一念三千も顯はれず」と言はれて居るのてあつて、大體の組立は方便品に於て判るけれども、その眞意は壽量品の本佛の實在を論證しない限りには、一念三千の極意が徹底しないといふことになつて居るのてあります。大體一念三千の法數を申しますれば、一心に十法界を具し、十法界互に十法界を具するが故に百界となる、その百界に各〳〵十如是を具してそれが千如になる、それに三種の世間を具するが故に三千世間となる、それを一念に具へて居るといふことに依つて一念に三千を具するといふことを言はれたのてあります。一念といふのは吾〳〵の心に起るその時〳〵の考を言ふのてあつて、それに總ての宇宙全體が具はつて居るといふことを言つたのてありますが、之を全體的に見ればその一念は宇宙の本源を說明して居るものてある、總在一念といつて「總ずれば一念に在り」といひますが、その場合には宇宙を心の方から見て一元に解釋する、無論それは內含的と言つて、心と言つても三千を具へて居るのてありますから、心を本にして三千法界を具した一念と見る、即ち心的內含一元てある。それは西洋の方て研究した思想も略〳〵同一の所に進んて參つて居るやうてありますが、その最も巧妙なるものが天台の『止觀』に說いた一念三千論てあります。三千は唯今申すやうに十界各〳〵お互に十界を具するて、地獄より佛界に至る迄の十界が各〳〵十のものを具へ合つて居るが故に、百の數を成ずる、その百法界が各〳〵十如の因果關係を以て運轉して居るが故に千如となる、それが三種の世間と申して、第一は衆生世間、これは人と言つても一人てはないのてあつて、大勢の人が多くの仲間を成して互にある事を衆生世間といふ。それから五陰世間と言つて、衆生には色、受、想、行、識の五つのものを具へて居つて、その感覺が皆違つて居る譯である。それから第三には國土世間、即ち依報と申してそのものの依る所の國土が各〳〵違つて現れて居る。この衆生、五陰、國土の三種に差別して現れて居るものが各〳〵に附いて居るが故に三千の數を成ずるのてある。要するに迷へる者、悟れる者、その間に千變萬化、限りなき多くの階段があつて、それに感覺があり、世界がありする所の、所謂森々羅列して居る總てのものを指すので、世間の言葉て言へば森羅萬象といふ、それを三千の數にかぞへ成したものてある、時〳〵に起る所の一念に森羅萬象を具へて居るといふことを言つたものてある。それは前にいふ總體的に見る時最も能く判るのてありますが、唯の心と言はずして宇宙本源の大生命といふか、さういふものに於て一切を具へて居るといふことは、萬有に生命があるといふことに見ても宜い譯てある、一切の物は生命の無いものてはない、總て

に生命が行渡つて居るものである。所がその意味合ひを個人に持つて來る場合に、個人の上に差別的に現れて居る心のその中にやはり萬象を具することになるので、それは心は靈妙なるものであるから、宇宙の全體に於て心的一元を說いても、個人の內に有つて居る所の一念に就いて論じても、その一念といふものは大小を絕してしまふが故に、同じ關係になつて居る譯である。それ故に一人の心と雖も之を身體の中に押籠められて居るものとは見ないのである、それを押籠められたと思うて居るのを迷ひと言ふて居るのである。心は身體の中にあるとも外にあるとも中間にあるともさういふ場所を指定することは出來ない、即ち之を卷いて藏めれば內に藏するし、之を放てば六合に廣がると言つたやうなもので、一心法界に遍するといふ方から考へる時には、總じて宇宙を說く場合も、個人の心を說く場合も同じ關係になつて來るのである。併し說明の順序は全體で說いた時の方が判りが宜いから、それを持ち來つて個人の上に於て考へ、又その同じ心でも左樣に內に押籠められて居るものとして考へる時は尙ほ判りが惡いから、幾分でも心の發達したものゝ方に就いて考へて行くといふと、成る程人間の心には斯の如き樣樣なるものがあるといふことが能く判る。之れをモウ一つ佛の覺まで行つてしまふと、佛の覺の一心には法界の萬象を照して、諸法實相と佛の覺が一つになつて居ることが判る、さうすると始めの總在一念の大きな一念が、佛の覺の一念に合して居ることが最も能く判る譯である。けれどもそこまで行かんでも、何處でもそれは合して居るといふ理があるのでありますから、そこでその種々なる階段は立てるけれども、その立てる當處々々に於て皆一念三千の妙體であるといふことが言はれる次第であります。その意味合を能く心得、それを悟りあげていくといふ爲には法華三昧の行に入つて、さうして心を靜めてその妙味を味つて行く、止觀の觀法を修するといふのが天台の立てた所であります。所が日蓮聖人に至つては「それでは未だ義理が完成しない」と言はれた、それはその十界の相具する關係の主なるものは佛である、九界は迷ひてあるから、十といふけれども詰る所迷悟の二者に歸着するので、迷へる者の實在が論證されても、悟れる者が實在でなかつたならば、十界の關係が壞れてしまふ、即ち迷悟の關係が最も重い事なので、吾々のやうな劣つた心、迷へる心にも其の奧には絕對の佛と同じものがあるといふことに於て意味を有つのであつて、迷へる者と迷へる者が具へ合つて居るといふ事では、何も不思議もなければ妙味もない譯である。それ故に一方の佛界の常住を論證しなければ、十界互具の敎義が壞れてしまふ。或る時期からは存在を許されても、或る時期には壞れてしまふ。佛が途中から出來たものとするならば、その出來ない以前といふものは九界だけの實在は尊重されるけれども、十界が常住といふことは言へない、そこに「本無今有の失あり」といふことになる。

斯ういふ工合に或る時期以前に於ては九界だけは存在するけれども、佛界が無い。玆に至つてこの九界の中のものが悟つて佛といふものに成つたといふことになると、この佛は「本無くして今有る」といふことになる。

ふことになるから、さうすると一念三千の教義は途中から構成せられたもので、物の本源を説明する力が無くなる。迷へる我が始め無く存在して居るといふことは何處でも認め得られるけれども、佛の始め無き久遠常住といふことが十分に論證されて居ないから、それで一念三千の教義が成立たぬと日蓮聖人は言つた、即ち「發迹顯本せざれば眞の一念三千も顯れず」といふのである。例へば阿彌陀如來が有難いといふ方から論を立てゝ行けば、十劫の間修行をして阿彌陀如來となつたといふけれども、その以前は法藏比丘である、その法藏比丘に成る今一つ前を辿つて見ればやはりこの九界の迷へる者で、或は畜生であり餓鬼であつたかも判らぬといふやうな、六道流轉の中の者が人と成つて發心して菩薩行を積んで、而して後に阿彌陀如來となつたといふことになるから、十劫以後には阿彌陀といふ佛がありけれども、その前には悟つた者がない事になつてしまふ。その事は哲學的に頭腦が出來て居る人から見れば多くを論ずる迄もないことで、哲學の論據は、實在性を帶びない者はみな假定として價値の無い者と見るのでありますから、日蓮聖人が、壽量品に至つて本佛が顯れんければ一念三千の義が成就しないと論じたのは、日蓮教學上の最も大事な點であります。

それから又實行の上に於ては、左樣な十界が互に具して居るとかいふやうな宇宙の狀態を觀念觀法して行くといふことになるならば、それは非常な智力の行であつて、それが能く自分に了解され、さうして悟りのやうな意味になつて行くといふには、餘程の修行を積んで行かなければならぬ、一通りの理解といふやうなことは佛教では價値の無いものと見て居る、それは所謂解といふもので、佛教に所謂信、解、行、證の中の第二に位するものである。解といふのは一通りの理解である、それを行に移して今度その意氣合を本當に證るといふことになるのである、この證るといふことが目的でありますが、それには天台は所謂摩訶止觀の行、法華三昧の行を積んで行かなければならぬと言つた、それはこの解であつて、前にいふ通りに唯だ宇宙の實相の相互關係といふやうな意味合を理解するのであるから、智力的の行に依つて行かなければならぬことになる。日蓮聖人の言ふ本佛を根本より認めて進むといふことになると、この本佛と九界との關係は、唯だ機械的にこれが自然に具して居るといふ關係ばかりでなく——機械的、自然的といふのは人々の心の中には自然に十界がある、他の者にも十界があるといふやうな事が所謂自然的、機械的の關係である、日蓮の教義に依ればそれが精神的關係といふことになるのであつて、即ち佛の方に於ては迷へる者を救はうとする所の慈悲救濟の精神になつて來る、又衆生の方はこれに對する發心、渴仰の心になる、內には佛性が眼を醒まして向上しやうとし、外には本佛を渴仰するといふことになる、この衆生の渴仰と本佛の救濟の結びつく所に精神的關係といふものを生ずる。自然的關係の外に精神的關係といふものを說くから、そこでこの理解が唯ださういふ自然的關係だけを理解して居ないで、精神的關係を理解する、吾々は信仰となり渴仰となつて本佛に向はんとし、本佛は慈悲を以て救濟する爲に十分の力を與へられるといふ事を理解するから、行に移る時にはこれが信仰

中心の行になつて行く、さうして證る時は自分の智解が伸るにあらずして、功德の力、本佛の力に依つて自分の有つて居る佛性が開發するといふ、玆に自他の協力となつて來る譯である。即ち佛の偉大なる力と、吾々の信仰の力とが結びつくことになる、天台の「止觀」の行に行くと純自力になつて來る、自分の力のみに依つて之を悟り上げるといふことになるから、それは餘程困難な事になる譯である。それ故に方便品の所では眞の一念三千が顯れないと言つたのは、本佛の實在が明かにならぬのと、隨つて精神的關係が立てられんからして、「眞の一念三千でない」と日蓮聖人が書かれたものであらうと思ふ。

私の學び得た所では、日蓮主義の根本教義は、哲學的に論究した結論と、道德的に研究した結論と、それから宗教的に研究した結論とがちやんと一致して、さうして自ら理智の滿足も意思の滿足も感情の滿足も、人間の精神全部の滿足が得られるやうになつて居ると思ふのであります。今の一念三千を哲學的に研究して行く結論に本佛を認めなければならぬ、道德的に研究して行く結論にもやはりこの慈悲の源、吾々の道德性の——所謂明德、佛性の開發の源を本佛に置いて見て行く、それから宗教の信仰もそこに至るのであるから、結局は「本佛の顯本」といふ一事が完全なる哲學であり、完全なる道德であり、而して完全なる宗教であり、その本佛に對する一つに於て吾等の智識の滿足も、道德の滿足も、情操の滿足もあるといふやうになつて居ると思ふのであります。そこまで徹底しない間は法華經を學んでも、日蓮をして言はしむれば「經意に徹底しない者」といふことになると思ふ。

それ故に哲學的の理論の方では無明緣起と佛界緣起の關係を明かにしなければならぬ、本佛を認めない時には、宇宙の本源を說明するにしても迷ひの方が起點になる、即ち無明緣起を以て總てを說明しなければならぬ、本佛を最初より認むる所に於て佛界緣起の思想があるのである、これに依つて一切の解釋がみな違つて行く。開目鈔に「壽量品に於て發迹顯本すれば十界の因果を打破つて」と言はれたが、その通りにみな違つて來る。この點はやはり日本の國體および道德の基礎に就ても、西洋文明とはどうしても根本が全部違ふものだと私は考へる、强いて迎合的の言葉を加へれば、いろ〳〵合せることも出來やうけれども、出發點が西洋の文明は無明緣起になつて居る。一切の政治の議論でも經濟の議論でも道德の議論でも皆さうである。宗教も基督教が神から說明した所は佛界緣起のやうであるけれども、神の造つた子が直ぐ罪を犯したといふことになつて、始めの神から來たといふ意味が非常に稀薄になつて、最初に現れた人が直ぐ無明緣起になつて居るのである、その點は非常に妙な宗教になつて居ると思ふ。それでは始終マゴつきが出來るであらうから、今日の基督教は餘程その點が苦しい關係になつて居ると思ふ。

それからもう一つは、吾々衆生の方から一念三千を見て行く時の一念は所謂佛性の問題であります、この佛性の問題に就てはやはり理佛性と行佛性といふ二つに問題が別れるので、冷かに潛在的なるものだけを見て居るのでは日蓮教學は成立たぬと思ふ。總ての物に佛性がある、あるといふ意味は、潛在的に論じて居るのであつて、それを理佛性と言

つて居る、誰にても佛性はあるといふ、それはあるに違ひないけれども何時までも潜んで現れないものであるならば、結局は無いも同然の事になる、永遠の中に何時かは現れるとした所が、さういふ待遠しい問題ではなくして、「有るのであるから現はさなければならぬ」といふことが世間に適切なる教であつて、即ち顯動的の佛性論である。又顯はし得べきものである、顯はさねばならぬものであるといふのである。佛性を潜在的に有つて居るといふ所に引かゝらないで、有るのは無論であるからそれを顯はす、又皆顯はし得て居るといふので、二乘作佛といふことも、作佛と言つて寧ろ二乘の佛性の顯動を法華經は說くのである。惡人提婆の佛性の顯動を說き、女人の龍女の佛性の顯動を說きして、總てこの經典に現れて居るのは、殆んど見捨てられたる、迚もいくまいと捨てられた者が皆佛性を顯動して居る實例を擧げて、如何なる者でも導くに道を以てすれば必ず佛性が顯動するといふことが、この哲學的の大事な基礎であると思ふ。だから一方は佛界に就ては本佛の緣起を見、九界の迷に就ては佛性の具はつて居ることは無論として、更にその顯動といふ所に力を入れたものである、佛界緣起と佛性の顯動といふこの二つが大事な要點であります。此處に徹底しない間は、法華經を見ても教義が判るまいと思ふ。

それから道德の問題は、無論慈悲報恩といふことがやはり法華經の道德の思想でありますが、その慈悲報恩の道德の思想が本佛の慈悲から導かれて居る。さうして又その本佛の慈悲から導かれるといふことを唯だ高い所に置いたのでは法華經ではないと思ふ、本佛は廣く宇宙に慈悲の光を放つて居る、廣

大な慈悲があるといつて、之を唯高さに置いて見たのではいかんので、その絕對が吾と一致して來るといふことが法華經の思想であります。それ故に道德の基礎は本佛の慈悲に源を發するけれども、その慈悲がやはり吾等の慈悲となつて居る、本佛の慈悲であるけれども、それが吾等の慈悲心の所に來つて御座る、それは法師品にもある通りに「如來の室とは一切衆生の中の大慈悲心是なり」で、如來は慈悲の室の中に居るが、その如來の慈悲室といふものは何處にあるかと言へば、吾等の慈悲の心が即慈悲室であると言つて、これが一つになつて居る。それは所謂神人合一と宗教學では言うて居るやうであるが、神が吾に降つて居るといふことが非常に強い意味であつて、最初は本佛といふものを向ふに置いて拜んで居るが、終ひには佛と吾等と所謂抱擁してしまつて、自分の精神の中に佛が働く、それが理論的でなく機械的關係でなく、精神的に於てその結合を說くのであります。「佛と言つても別に在るものではない、吾等の慈悲ぢや」といふのを理論的にして、佛を蹴つて所謂內在的の神とか、內在的の佛とかいふ議論が今日は流行つて居るが、あゝいふ哲學者が言ふやうな思想ではないのであつて、客觀的に認めて渴仰を捧げ得た偉大なる佛が、吾々の主觀的の慈悲心の中に融合して來るのである、「吾等の慈悲心が即佛ぢや」といふことが機械的、理論的に之を言ふのではないので、非常な偉大なる佛を外界に認めて、それを渴仰して居る、併しそれは遠きに求めることはない、「自分の慈悲心を起せばそこに渴仰の如來は來れり」といふやうに、之を溫かな信仰の精神的の狀態に於て說明して居る。それは日蓮聖人が

やはりその通りになつて居るので、釋迦如來の慈悲を渴仰して日蓮が慈悲心を奮ひ起して、その慈悲のそこに强き力が現れて居るのであります。あれを唯だ機械的に「佛を他に求むることなかれ、日蓮の慈悲のその中にあり」といふやうな禪學でいふやうな風に言うて居るのではない、さういふ意味合とは全然違ふ、あゝいふ意味を非常に高いやうに思ふけれども、それは却つて低いのである、理論的研究の途中に於て自他不二とか、迷悟不二とかいふ平等論の上に於ていふのである、それは機械的の議論であるから、一切のものは事々物々相關して居るといふことを自然的にいふのである、そんな事は何處でも言うて居る、その方が高いと思ふのが非常に本末顚倒して來る病源である、それは順序よく教義を學ばない素人が多いからだと私は思ふ。そんな事はモウ

凡そ大乘教、圓教と稱するものゝ通則である、佛で言へば法身の常住は聖教の常談といふやうなことて、迷悟不二といふやうな事は聖教の常談である、さういふ事は平等論の關係として何處でも言うてある、併しそれだけでは行詰つてしまつて、信仰も起らなければ何も起らない、却つて宗教の行詰りになるから、さういふ機械的關係の外に精神的關係を說くのである。それと同じ式であつて、道德上の議論もやはり十界互具と言へば「佛とは何ぞ」「吾等の慈悲心ぢや」といふ位のことは始めに言ふことだけれども、そんな意味の所でいふのではない、モウ一つ實際に佛の慈悲を渴仰して、自らも下に向つて慈悲心を現はす、その慈悲が自分の心の發動して居る所に如來在せり、所謂本具の如來といふ、唯だ理論的でなくして、絕對無限の客觀的に渴仰したる如來が、

吾が精神の中に來つて働き給ふものである、そこで非常に有難い意味になつて來るのである。以前から有つて居るものであれば、「頼んだのでも何でも無い、生れながら有つて居るンだ」といふやうになるから、有難い意味にはなつて來ないのである。

それからこの本佛の慈悲が源となつて吾等の慈悲心が働いて居るが、その事はどう現れて居るかと言へば即ち菩薩の立行でありまして、菩薩の一部分に加はるといふことが法華經の道德であります。吾々は何時も唯だ凡夫といふ立場ではない、一面は凡夫であるけれども、此法華經の信仰に入つた時は菩薩の一分に加へられて、不十分な者ではあるけれども菩薩の行に入りし者であるといふ自覺を徹底して行かなければいくまいと思ふのである、何時も〳〵平凡な凡夫と同じ立場に後戻りばかりして居つてはいくまい。そこで法華經の行者とか、日蓮の一類といふ言葉を日蓮聖人が盛にお使ひになるのはそれであつて、即ち自ら任じて菩薩の行に入つたといふことを盛に日蓮聖人は言はれて居る。それは受職灌頂とも言つて居りますが、基督教で言へば洗禮を受けたやうなものであつて、菩薩の職位を受けるといふのである。これは丁度皇太子の位のやうなものをいふのであつて、所謂東宮である、この次には天皇に成られるといふが如くに、菩薩の立行に依つて受職灌頂して居る者は、その行の進み行く結果は佛に成るといふ確信を有つて居る、その事は最早や極つて居るのである、丁度東宮冒立といふ事がちやんと極つたやうなもので、この次は誰が天子樣に成られるといふ事が極つて居る、そこに於て即ち道德の觀念が然えて來るのである、責任も感じて來る譯であ

る。即ち受戒灌頂といふのは、佛の扶補者として定められて居る者である、それが非常に强くそこに信念を打込んであるが故に、道徳實行の力がそこから湧いて來るのである。之れを簡單に言へば即ち本佛の慈悲と菩薩の立行といふことである、佛界緣起と佛性の顯動といふも同じ事になる、唯だ名が違ふだけである。佛界緣起といふ事は本佛の慈悲から緣起する、それを哲學的にいふから佛界緣起論である、道徳的に言ふから本佛の慈悲である、一方は佛性論で哲學的に言ふから佛性の顯動といふが、道徳的に言へば菩薩の立行といふ、同じ事である、即ち哲學の調べ方で行く結論と、道徳の調べ方で行く結論とが、言葉の顯はし方は違ふけれども、同じ處に歸着して居る。この意味がスッカリ判れば渾然として一になる、そこに所謂第一義が存する譯であらうと思ふのである。

そこで之を宗教の方から見て行けば、宗教學的には茲に統一の本佛といふ事が顯れて來ると思ふ。宗教學に於ては多神主義とか一神主義とかいふことが喧ましい問題となつて、大體は多神教と單一神教、それから唯一神教、汎神教といふやうなものになつて、それだけは今日の宗教學で論ぜられて居る。それで先づ多神教や單一神教は到底物に成らぬことになつて居るので　今日は唯一神教と汎神教とが喧嘩をして居る、これはどつちにも理窟がある、哲學的に言へば汎神教に眞理がある、人間は誰でも皆佛性を有つて居つて佛に成れる、神は一人であるといふことは判らぬ、凡ての者みな神と成り得なければならぬといふから、哲學的に言へば汎神主義が勝つ譯である。けれども誰でも佛に成れるといふ所から、

これが宗教となると所謂多神教になつて行く、さうすると今度は信仰といふ問題が無くなつて來て、汎神教が行き詰つてしまふ、お前のいふやうに誰でも佛に成れるといふことになると、信仰の統一といふものが無くなつてしまふぢやないか、そこでその場合には唯一神教の方が勝つことになる。さういふ譯で、これはどちらにも長短がある譯である、唯だ戰爭をするには敵の短所を衝くといふやうな譯で、己れにも短所があるけれども、早く突き込んだ奴が勝だといふやうなことになつて、さういふ喧嘩をやつて居るのである、自分の方の短所を衝かれない內に敵の短所を衝いた奴が勝つたやうに見えるけれども、今度は又こつちから盛り返してやらうといふので、いろ〳〵議論の組立をやつて、敵の短所を衝いて行く、今日日本の坊さんなどがやつて居る議論でもそんな事ばかり多いが、それは淘に愚な事を繰返して居ると私は思ふ。思想の研究はそういふことてはいけない、「どつちにも善い所があり惡い所がある」ナンと言つて居つてはいけない、唯一神教に於ては唯だ長所が一つあるといつて見た所で、その根據が間違つて居るのであるからこれは駄目だ、唯だ信仰の純一をはかる便宜的に於て長所があるといふだけて、根據が間違つて居るから駄目である。汎神教といふのはこれは嚴正に言へば宗教が構成されて居らぬ、家を建てるにして見たならば丁度地形のやうなものであるから、未だ建物といふものは建設されて居らぬものである、これては駄目である。一方は地形に暇がかゝつて建設が出來ない、一方は地形を顧ずして無闇に建設ばかり急いて居るといふやうなものであるからどつちもいかん、何時まて經つて

も家を建てないて、地形ばかり立派にして居るといふのも馬鹿漢てある、地形を構はないて大きな家を建て居るといふのも馬鹿漢てあるから、本當を言へば何も長所は無い、一長一短といふけれどもそれは要するに詰らぬものて、氣違ひじみたものてある。物は徹底して考へなければいかん、學者ナンといふ者がそれを一長一短だナンと言つて煽て〻置くから好い氣になつて、何年經つても地形ばかりコツ〳〵叩いて居るやうなことをやつて居るのぢや、世間の仕事にして見たならば、どちらも氣違ひじみたものぢやといふことになる。そこてこの地形に於ける汎神の眞理と、それから建設の所に統一神の思想を導き來れば宜いのてある、これが即ち方便品の佛性顯動の思想に於て現れたのは、汎神主義の一番完全なる說明てあつて、如何なる者と雖も佛性を具し、且つこれが顯動するといふことを極力說いたものてある。併ながらそれだけては未だいかんから、寶塔品から佛の統一にかゝつて、壽量品に至つて愈々最高の統一本佛を顯はした、玆に於て唯一神教の弊、多神教の弊、すべての弊が無くなつて、汎神の基礎をその儘活かしてそこに統一神の理想に達して居る。即ち哲學に於ての汎神思想と、宗教の統一神主義とのみが完全なるものてある、あとのものを認めることは間違ひてある。てあるから是を日蓮聖人は「一切經の中に壽量品無くば、天に日月無きが如く、人に魂無きが如し」と言つたのてある、統一本佛が顯れんければ宗教の歸着は立たぬ、佛教ありと雖も用を爲さぬといふことを論結したのは、非常に尊い所てあると思ふ。阿彌陀樣がよいとか藥師樣がよいとかいふやうな間に合せのことはいかない、佛教に

大僧正本多日生師講述

那先比丘經通解

睡の善惡で、その觀念が無くなつてしまつて心は朦朧として日暮れのやうな有樣になる、さうして終ひに睡氣が出て來て欠伸でもすると云ふやうなことになる、唯ボンヤリしてしまうて何の理解も信念も理想も無く、精神朦朧として居るやうな事になつて來たならば、その虛に乘じて惡念がそこに起つて來て、所謂小人閑居して不善をなすと云ふやうな具合に、ボンヤリ坐り込んで坐睡り半分でやつて居る。腹が空いたから飯が貰ひたいとか、一杯飲みたいとか碌な事は考へない、朝から晩まで少い時から年を取るまで壁に向つて善とも念ふこと勿れ惡とも念ふこと勿れと云ふやうな風にやつて居る、さうして何も知らない人間になる、それが良いと云ふのである、さう云ふ者は唯殘るのは坐睡だけである、それを又取つてしまへば後は枯木の如く灰の如くである、死灰と云ふのは溫もりもない冷たい灰を云ふのである。枯木が冷たい灰の如くなつてしまふやうに人間を導いたならば、社會國家はどうなるか、實に無氣力な消極的なものになつてしまふ、斯う言つて佛敎に反對して居るのであるから、是は禪學の病弊に對して論じて居るものであることは明白である。併しそれを佛敎の全般に亘つて左樣であると考へたのは、即ち彼の間違である、是は心地觀經にもありましたが、邪道即ち世間の俗惡なる思想を矯正する爲に、屢無念無想と云ふ事を云ふので、俗惡なる思想が起つて酒を飲んで見たいとか、遊びに行きたいとか、錢が無いから泥棒しようとか云ふやうなつまらない考を起す、さう云ふ考を起すな、酒を飲みたいと考へるな、泥棒したいと考へるなと云ふ風に、惡い事を考へる者に向つて、左樣な事は考へるな、ああしたい

斯うしたいと云ふやうな慾望に誘はれては碌な者になれない、それでは佛が左樣な雜念を起すなと云ふのである、それを一言にして言へば、邪道を退治せんが爲に無念を說くのである、併ながら無念を說いたが爲にその方に傾き過ぎて、世の中の道德的の活動をも否認することになれば、それは空の病である。前には世俗的の劣慾に囚はれた病であるが、今度は社會の道德を蔑視したる考になつて、或は獨善的に、或は悲觀的に、或は放縱生活的自暴自棄の考になつてしまふと云ふ、極端な空の病が起つた時に於ては、それは一層恐るべきである。寧ろ俗惡なる思想に囚はれたる者は治すことは出來るが、空の病に陷つた者は施すに術が無いと釋迦は心地觀經に說いて居る。そんな譯であるから、佛敎は無念流の昏睡狀態に陷ることを非常に虞れて居ることは明らかである、故に陽明は心地觀經一卷も讀まず、唯禪宗坊主等を詆めて、それを以て佛敎の全部だと思つて居つたので陽明は偉いと云つても、遽くとも佛敎に就ては無學である、無學であつたから斯う云ふ間違つた事を述べて居るのである。このお經に於ては今言つた、昏睡せるが如きは佛敎でないと云ふ事に就て、六善事の中に明かに念善と云ふことを揭げて居る。どうして善い事をしなければならぬかと憶念するのである。陽明は戒懼の念を斥けると云つて居るけれどもこの那先經には六善事の一として、念善と云ふ事を揭げて居る。その他誠信孝順等皆是れ倫理的の敎訓である。而して更に人身觀を敎へる場合に於ては道德を成就せしむるが爲である事を說いて居る。人身觀を唯佛になる爲と云ふ目的に置かずして、高く深く、哲學的に宗敎的に觀念する事も、それが飜つてこの現實の世に德性を完成せしむる所以である事を明かにこのお經に說いて居る。それであるからこの點は非常に深い高い事を言つて、殆んど世間より超越したが如き事を說いて居るが、それは德義を向上せしめんが爲である。法華經には「我がこの法印は世間を充足す」と說かれて居る。我がこの法印とは實相を指すので、非常に深い宇宙の大哲理を說明して、殆ど現在生活とは緣が切れて居るやうに考へる人があらうけれども、是は世間を充足せんが爲で、人生を完全に圓滿に發達せしむる目的の爲に高い實相の事を說かれるのであるとこゝでは斷つて居るのである。それと同じに、宇宙觀に於て云へば高い實相論であるが、それを人身觀に於て云へば我がこの法印は法性論である、又佛陀觀に於て云へば我がこの法印は本佛論である。宇宙の實相を說き、又人身觀の根本を說くは、決して迂遠なる敎でなくして、現在の生活を向上せしむる爲であると云つて居る、玆に至つて佛敎の目的は直に明白なるものであつて、決して迂遠なるものでなく、道德を否定するものでなく、現在の生活に緣が切れて居るものでない、然るに種々なる口實を設けて佛敎を非難して居る。陽明と云ひ、會澤先生と云ひ、大先生であるけれども、而も佛敎に反對する根據はいつも明白なる誤解である、況してその他の學者の言は採るに足らざるものである、その採るに足らざる學者の言を採つて今尙ほ廢佛を云ふが如きは是れ全く無學の罪である、佛敎と云へば邪敎であるかの如く思つて居るけれども、實は佛敎は東洋文明の代表的なるものである。東洋文明の大切なる部分を占めて居るものは佛敎であつて、東洋の哲學、東洋の倫理の上に於ても、實

は儒教などよりは大切なるものである。四恩の說一つ擧げても儒教の仁義忠孝よりも上である。左樣な次第であるから、佛教を侮蔑するならば、東洋の哲學、東洋の宗教、東洋の道德、東洋の實際生活に於て大切なる理想、この社會を組成する所の理想、國家の準據すべき理想、個人の準據すべき理想が悉く淺薄無氣力となるを免れないのであるから、先人の誤れる批評に雷同附和して今尙ほ佛教に對して惡罵の聲を絕たぬ者は、佛教の敵と云ふよりは寧ろ東洋の文明を誤り、延いては日本の國家の進運に影響する所甚なからざるものである。今後幾年かの後に、今私がお話する事を國民が必ずや領解するであらう、日蓮聖人が叫んだ立正安國の思想も亦此に外ならなかつたのである、さう云ふ事を見るには、餘り面倒なお經ではいかぬ、佛教とは斯う云ふものだと言つて素人に見せるにはこの那先經のやうな簡潔明瞭なるものが最も適當であると思ふ。

尙ほこのお經には面白い例が揭げてあるので、本文に入れば分るが、今佛教が世人から侮蔑を受けるのは、一は僧侶自ら佛教の事に暗いので、「佛教とはどう云ふものです」「さあ、一寸言へませぬなア、色々ありますから……」「それならその中の一つでも宜しい」「その一つも私は能く知りませぬ」と云ふやうな有樣で、洵に不得要領である、それで以て威張ることだけは覺えて居る、立派な蒲團の上に座つて中啓を持ち込んで、威張つては居るが、愈々佛法の內容に入つて聞かれると總て誤魔化してある。この位威張つて居る坊主さへも碌なことは言はぬのであるから、佛法と云ふものも實質なく價値なきものであらうと、威張り方と比例して判斷して行く、恰度彼等の態度が、佛教を疑はしめ、佛教を侮らしむるべく出來て居る。知らなければ蒲團の上に座つたり、威張つたりしなければ宜い、味噌摺り坊主は臺所から頭を出して居れば淸むのであるけれども、それが座敷の眞中に座り込んで居るから佛教を誤るのである。このお經の初めに野悉羅と云ふ坊さんがあつて、それを王樣が招待した、どうぞ教を垂れて貰ひたいと禮を厚くして招いだ、所がこの野悉羅と云ふ坊さんは敎が聞きたければ來いと言つて威張つて居つたが、偖て愈々內容に入つて質問をすれば、極く簡單な事にも閉口してしまつて、非常に難を掻いた、この位の答辯が出來ない者があんなに威張つて居る位ならば佛敎はさう價値のあるものでないと王樣が考へたのである、所がその後に王樣が那先と云ふ偉い坊さんのある事を聞かれて、話を聞きたいと言はれた時に、那先は少しも威張らずに、直に自ら出て行つて、王を尊敬しながら敎を說いて王を敬服せしめたと云ふ事がある、その對照が頗るうまく出來て居るので、この點もこのお經に於て看過すべからざる良き誡である。

次にこのお經の五重玄義に就てお話する筈であります、初めに之を論ずるには、未だ讀まないお經を引用して證明しなければならぬから、却つてこのお經を講じ了つて後に、謹つて申上げたならば一層記憶が明白になると思ふから、便宜上直に要文を講述しようと思ふ。

那先便ち轉じて天竺舍竭國に到り、
泄坻迦寺中に止まる、前世の故の知識
一人あり、海邊に在りて國王の子と作

り彌蘭と名く、彌蘭少小にして好むて經を讀み、異道を學び、悉く異道の經法を知る、異道の人能く勝る者無し、彌蘭の父王壽盡くるや彌蘭立つて王となる、王左右の邊臣に問ふて言く、國中の道人及び人民誰か能く我と共に經道を難ずる者ぞ、沙門あり野恕羅と字す、經道に明かにして能く王と經道を難ぜん、王便ち沾彌利望羣に勅す、即ち行き往いて野恕羅に請ふて言く、大王大師を見んと欲す、野恕羅言く王の相見んと欲するは大に善し、王當に自ら來るべきのみ、我住かじ、王即ち車に乘り五百伎と共に寺中に到る、王、野恕羅に問ふ、卿何等を用つての故に、家を棄て妻子を捐て頭鬚を剃り袈裟を被むり沙門となるや、若し白衣有り家に居り妻子を有するも行ひ中正ならば、今世に於て其の福を得、後世に於ても亦其の福を得べきや不や、野恕羅の曰く、白衣にして家に居り妻子を有するも行ひ中正ならば、今世に於て其の福を得べし、後世に於ても亦其の福を得べし、王の曰く、卿空しく家を棄て妻子を捐て、頭鬚を剃り袈裟を被むり沙門となることを爲さんや、野恕羅默然として王に

報ずるなし。

この最初の一節は、那先比丘と彌蘭王との關係、即ち宿世からの因緣を明し、又彌蘭王と野恕羅と云ふ坊さんとの問答を揭げて、而して後に、那先と彌蘭との問答に進み行く端緒を開いて居るのである、前に申す通り、總て意味深き教訓がこの中に含まれて居るのである。

那先比丘が彼方此方を巡遊して天竺の舍竭國に行かれた、さうして泄坻迦と云ふお寺に滯在して居られた所が、前の生に於て因緣を結んで居つた一人の友人があつて、それが今この舍竭國の海邊の或る國の王樣の子と生れて居つて、それが彌蘭と云ふ名である、所が彌蘭は年若き時から學問が好きでお經を讀み、又色々の教を學んで、曾に婆羅門の教に滿足せず、その他の宗教又は哲學等の書物を研究して居つて、誰と出會つて議論しても之に勝れる者はなかつた、お父さんが死んだので彌蘭がその跡を繼いで王樣になつた。彌蘭王の志は學問にあつたから、左右の家來に問うて言はれるには、我が國内に宗教家、或は學者又は一般の人民の中で偉い者があれば誰でも宜いが、能く我と共に教のこと、即ち道德とか宗教とか哲學に就て論議する者は無いかとお尋ねになつた、所が家來の申すには、宗教家に野恕羅と云ふのがある、それは大變學問も出來、教にも明るいと云ふことでありますから、それならば國王と教の事を論議する力があらうと思ひますと言つた。そこで王樣は悅んで沾彌利望羣と云ふ家來に、それを喚んで來いと命ぜられた。家來は急いで野恕羅の所に往つて、禮を厚くしてお願ひした、今彌蘭王は先生をお迎へして教のお話をしようと思つて居られ

るから、どうぞお出でを願ひたいと懇請した、所が野犯羅が答へて言ふに、王様が私と會つて話をしたいと云ふのはそれは洵に結構な事である、併し私の方から往くことはない、私は大先生である、王と雖も敎を聞かんとすれば自ら駕を枉げて來たら宜からう、王様自らお出てになるが當然である、自分からは往かないと言つて威張つて居つた。仕方がない、王様は敎を尊重する精神から車に乘つて五百の附添の人々と野犯羅の住んで居る寺にお出てになつて、野犯羅に會つて尋ねられるには、御身はどう云ふ譯て家を捨て、妻子を捨て髮の毛を剃り袈裟を着て坊さんになつて居るのでありますか、若し在家者であつて妻子を持つて居つても、道德的に又理想的の行ひをして生活して居つたならば、この世の中に於ても福を得、又死後に於ても福を得べきものであらうかどうであらうか、在家者であつてもその行が立派でさへあれば、この世も後の世も宜い譯ではないか、何を好んで頭を剃つて出家になるのであるか、と言つて聞いた。野犯羅が之に答へて言ふには、在家生活の人で妻子があつても、その行が中正であつたならばこの世の中に於ても後の世に於ても共に幸が得られるのであると返辭をした、同じやうなことを言つて居る。更に王が言はれるには、果してさうであるならば、何を好んで御身は家を捨て妻子を捨て又髮の毛を剃り袈裟を著て沙門になつたのであるか、その趣意が解らないではないかと尋ねられた、「野犯羅默然として王に報ずるなし」この位の簡單な事に答が出來ない。軍人は戰爭に臨むものであるから家族的生活をする事が不利益である。それと同じく在家の人は業務を持つて居るから專門に宗敎をやる者

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民敎化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢
○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷近刊　送料一部金十八錢　年年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○佛敎信仰の正統　金壹圓參拾錢郵稅六錢
以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

一定價		
一冊	金參拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共

廣告料

一頁	金參拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十一年六月廿七日印刷納本
大正十一年七月一日發行（第三百三十號）

不許複製

編輯兼發行人　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　國友日斌
印刷人　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍
發行所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常樂寺內　統一發行所　振替東京五一〇七一番
編輯所　統一編輯所

目次

法華經より見たる現代思想（時言）……本多日生
王法佛法の冥合……本多日生
日本文化と外國關係……姉崎正治
實學（下）……山根日東
記事報道……
法華經要文講義……本多日生
那先比丘經通解……本多日生

第廿六年八月號